

第五章 地球初空爆——救世主発現

2021/12/11 初UP by OHYABU

(一)

地球——南半球の真冬。

風がなく冷たく晴れわたった早朝。

突然、ピカッと光が放たれた。

「来た！」

「デカッ！」

広いグラウンドを重い軍服を着て走っていた男女十数人の若い兵士たちは、いっせいに空を見上げた。

誰もがはあはあ息を切らしながら、立ち止まった。

「今度のは、どっかに落ちるんじゃない？」

「いやあ、直接攻撃食らうことにくらべりゃ、どおってことないよ」

「そうそう、地球が守られてるって証拠。わが地球国軍は優秀。サップスたちも駆逐して、最近ようやく地上も穏やかに……」

「なっていない！残党がどこに潜伏してるかわからないのに。なのにこんな見晴らしいところで、朝の軽いウォーミングアップ“しろなんて”

「一般のピネロン人でさえ、まだ捕まえきれないのにね」

「だから、おとりだよ。訓練兵はまだ役に立たないしな。せいぜい自分のことは自分で守れって、この重装備だ」

「……ソレ、ちよつと考えすぎじゃあ？」

「うー、チクシヨウ、早く戦場で奴らを倒したいぜ！」

ほとんどが息をとり、わいわい話し込んでいる中、ひとり走り続けている若者がいた。レザード。

仲間たちはあきれる。

「まただわ。積極的おとり候補。いつもは一番ふざけてるくせに」

「まあ、なんやかんや言っても、あのキニスキー少尉の甥だからなあ」

仲間たちの反応に気づいたのか、レザードは途中で止まり、後ろを振り向いて、陽気に手をふった。

「くそっ、いいかつこすんなよなあ」

対抗心満々に、スキンヘッドの若者が走り出した。

レザードは、にこやかに仲間たちを見やっつてから、くるっと正面を向く。すると笑顔は消え、苦悶さえ浮かぶ表情に。

そして、ただ走る。

自らを追いつめるように、ただ走り続けた。

戦場は、今のところ宇宙空間に限られていた。

双方に大被害をもたらした木星戦のあとは大きな直接的戦闘はなかったものの、地球側はピネロン側の多数の工作員（サップス）たちの侵入を許してしまった。そのため彼らの「駆除」と、防衛体制の大幅強化が最優先で進められた。

防衛体制で特に強化されたのは、地球全体と、火星エリアの三つのワームホールのそれぞれの出入り口を覆うレーザーの膜。前者は通称「地球防衛膜」、後者は「火星防衛膜」と呼ばれた。

「地球防衛膜」は、地上の各所から宇宙空間に向けレーザー光を放ち、それら光の点を繋ぎ、地球全体をおおったもの。もともとは「逸失の日」でのような災禍を察知するために開発されたシステムであった。一方「火星防衛膜」は、火星基地から発射するレーザー光を、複数の小型宇宙船によってキャッチ・中継・拡散して、三つのワームホールの出入り口をそれぞれおおうシステムであった。

ただ、それらのレーザー膜はあくまで異常を察知するものであって、災禍を振り払う機能はない。振り払うのは宇宙船が戦闘機の役目であった。

しかし最近になって、災禍を直接振り払うための強力なレーザー兵器が、月基地と、外地戦闘機すべてに配備された。通称「防衛ラケット」とも呼ばれるもので、飛来物を受け止め、粉碎し、安全な場所へ跳ね返す機能とをあわせもったもので、月基地からは大規模に張り出させることができた。戦闘機から張り出せる規模は小さかったが、月基地からの指示で連携して動かせば大きな防衛力を発揮することができた。

いまや月基地は、地球防衛の重要な最前線となっていた。「地球防衛膜」と「火星防衛膜」からの情報を受けとり、火星基地と連携をとりながら、外地——つまり宇宙空間での宇宙船や戦闘機への直接指示を担う。

もともと月基地には、地球全体の通信を正常化するある重要な任務があったのだが、それに加えてである。あまりに重要化し複雑化した月基地を統括するために、外地司令官テイエンは、火星基地から異動となったのだ。

「天才的」情報処理能力と身体能力をあわせ持つ彼女は、彼女自身が選んだ「天才」たちとともに、地球防衛に専念することになった。

午後になると、レーザーたち訓練兵たちは、大きな施設の中に集められた。

彼らの前には、大スクリーンが。

大きなリモート画面には、ピッツの顔が映っていた。

地球国軍の歴史の概略を語っていた

「……そして「逸失の日」のあと、国連事務総長から地球国初代大統領となったカーライル氏は、国連軍主導で新しい世界区分を作りあげた。二代目フキヤ大統領は、軍出身ながらあらゆる分野にわたる行政機構を整備し、国連軍を地球国軍事部という行政機構のひとつに落とした。これは軍の降格ではない。様々な諸事から解放されたことで本来の役割を磨き上げ、宇宙への再進出にも先導をとることができたのだ。

そして軍の力によって、三代目アデル大統領の誕生を——〈逸失の日〉以降初めての民主選挙を、実現させることができたのだ。誇るべきことである。組織を防衛軍と改称した今、この未曾有の国難に対し、再び軍主導で立ち向かうのだ」

レザーは思わず苦笑。しかしまずいと思ったのか、すぐに顔を伏せた。
ビッツは高揚しつつも、硬い表情を浮かべはじめた。

「現在ティエン外地司令が最前線で地球防衛に当たっているが、敵はいつ本格的に攻撃してくるかわからん。最近〈火星防衛膜〉をかくぐつての小さな無人機の襲来が増えてきている。今のところ〈防御ラケット〉によって駆逐できておるが、何らかの次の攻撃の前触れではないかとの見方が濃い。なにより、以前潜入してきたサップスの一部が、まだ地球上に潜伏していると思われる。彼らがどれだけ残っていて、どういう情報を本国に送っているのかは、正直不明だ。」

地上での基礎訓練を終えた君たち訓練兵は、宇宙任務にも当たれるよう月で専門訓練に入るが、途中いつ実戦に入るかもわからん。こういう緊急時のおりであるから、君たちに休暇が三日しか与えられないのは心苦しいが、今回の休暇が最後の休暇との覚悟で、十分整理をしてくるのだ！」

ビッツの話は終わり、リモートは切られた。

訓練兵たちはひとりずつ順番に、月基地から派遣されてきた二人の上官の前に立ち、正規の銃を手渡された。

レザーも受けとったが、そのさい異様な視線に気づく。

二人の上官はどちらも中年男性で、年の順からクラーク中尉、ピレイ少尉と名乗っていた。

クラーク中尉は明らかにアジア系であったが、叔父に似た印象のある冷たい顔で無表情。ピレイ少尉は、肌の色も髪の色も薄く、笑ったような顔をしているもののやはり無表情であった。

やがて「儀式」は終わり、自由時間となった。

解放された若者たちは、ほっとして、そこいらで談笑をはじめた。

「おふくろの顔を見てくるよ。君は？」

「父さんがここに来てくれることになってるの」

肉親と会う予定の若者たちは、うれしさと不安をのぞかせていた。

その一方で、「たった三日でなにができるんだ」と不満をつぶやく者も。

レザーに対抗心を示していたスキンヘッドの若者は、ひどくイラだっていた。

「三日なんて長すぎる。帰れる家なんかはないのによ！」

横にいた仲間が驚いて彼を諭す。「カウチャ、声が大きいわ」

しかし、カウチャと呼ばれた若者は、「俺は一刻も早く月に行って親父の仇をとりたいたいんだ！」

——若者たちには、さまざまな事情と思いがあった。

少し淀んだ空気が広がるなか、いきなりレザーの声が響く。

「どうだ？用のない奴は、これから懇親会しないか？食堂使っていってさ」

みな驚き、ぽかーんとし、「へっ」「なに？」

レザーはかまわず、「用がある奴も、時間があれば加わったらいぞ。参加は自由」仲間たちはあつげにとられ、「懇親会?」「なんかするの?」

レザーは違う違うと手をふり、「特に何も企画してない。ただ音楽流す許可取ったんで、歌っても踊ってもOKってことだ。少々騒いでもOK。酒以外なら持ち込みもOK。ただぼおつとしてるだけでもいいし、おしゃべりしてもいいし、騒いでもいい」

なおもあつげにとらせる仲間たちを前に、レザーは続ける。

「ただし今日限定だ。明日以降あそこは、家族がたずねてくる連中が使うことになってる。だから片付け込みでせいぜい夜九時頃までってことで、どうだ?」

レザーはいったん話を終えて、ふうと深呼吸。

すると、さつそくカウチャから非難の声が。

「ふ、ふざけんなお前、こんな時に懇親会だなんて。上官どのがおられる前で!」すると全員、近くにいたクラークとピレイの顔を見やった。

クラークは腕を組んだまま顔色を変えることなく、

「理になつてる。リラックスできる時にはリラックスしておいたほうがのちのちの効率が良い。向こうじゃ緊張しっぱなしになるからな」

——これで空気が変わった。

訓練兵たちはわいわい騒ぎはじめた。

「酒はダメなのか?」とうらめしそうにレザーにつめ寄る者もいたが、

「外行けよ。オレみたいに飲めない奴のことも考えろ」とレザー。

「そうだ、飲んべえは外行け、外行け!」と陽気に、他の者たちがはやす。

カウチャのようになおも眉をひそめる者もいたが、もはや抗議することはなかった。

肉親と会う予定の者たちは、仲間たちの様子にほつとしていた。少し後ろめたい思いでいたからだ。

帰省する者たちも、とどまる者たちも、レザーを中心になごむ。

そんな後輩たちの様子を、クラークとピレイは無表情に眺めていた。

やがてレザーは二人に近づき、

「ありがとうございます」と頭をさげた。

それに対し、

「さすがはあのキンスキー少尉の甥だ。少尉のおかげでサップスどもの駆除も進んだ。まさに地球防衛の要だ。その甥となれば気配りも超一級だな」とクラーク。

「学業をわざわざ切り上げて軍に来たと聞く。さすが叔父貴殿同様、愛国心も強いんだろうな」とピレイ。

二人はほめる言葉を並べながらも、笑わず無表情のまま。

レザーは、意味不明な冷たい視線に気づきながらも一礼して、二人から離れた。

そして仲間たちと、食堂へと移動しようとしていたが、

「レザー」

金髪でそばかすだら青年が、彼の腕をぐつとつかんだ。

「ユーリ?」

レザーは少し意味ありげな彼の表情を見て、仲間たちにはあとから行くからと告げて、その場に留まる。

「ユーリ、どうした？間に合わなくなるぞ。家は遠いんだし。もし間に合わないと罰せられて……」

「すぐ帰るよ。お前こそ帰らないのか？俺んちと近いじゃないか」

「いろいろやることもあるんでね」

「親父さん、まだ拘束されてるのか？」

レザーはさつと顔を曇らせた。「とつくに釈放されてる」

「そもそもながあつたんだ？」

「たいしたことじゃないよ」とレザー。

ソニカを救うために自分が引き起こしたトーカーサス星での事件。事情聴取のため父が一時的に軍に拘束された。そうした事情は話せない。

ユーリは腑に落ちない顔をしながらも、

「だとしても、親父さんひとりだろ？帰ってやらないのかよ」

「今はひとりじゃない」

「え？あ……あ……そうか、忘れてた、親父さん、再婚したんだっけな」

レザーの顔が、みるみる歪んだ。

その表情を、近寄ってきていたクラークとピレイは見逃さなかった。

ユーリは続ける。

「たしか、お前のばあさんとこの教会関係者だったよな。うまくいってないのか？」

レザーはぐつと笑顔をつくって、首をふった。

「だから別にオレは帰らなくても大丈夫なんだよ。会ったらよろしく言っといてくれ！」

そそくさとレザーはその場を去る。

「おい、待てよ、レザー！……え？」

クラークとピレイが、いきなりユーリの前に立ちはだかった。

「ちよつと聞きたいことがある」

「え？え？」

ユーリは困惑する。

施設の外に出たレザーは、仲間たちの背中を見ながら、離れたところへと向かった。まわりに誰もいないことを確認して、がっくり頭を落とした。懐から出したのは、手書きの楽譜を折りたたんだものだった。

「ソニカ……」

肩を震わせながら、冬の青空を見つめた。

(一)

ほぼ同じ頃の、地球の北半球――

星が輝き始める夏の夕空を、ピーターは見つめていた。

ここはソクラトン邸ではなかった。

小高い丘。オリーブの木がそこかしこに植わっていた。

「ピーター！」

遠くからリンダの声が響く。

やがてピーターのもとに駆け寄ってきた。

「ピーター、どこ行ってたの！またいなくなつて！心配したんだから！」

「大丈夫だよ。ここは島なんだから。どこにも行くところなんてないよ」

「ううん」リンダは首をぶんぶん横にふり、「船さえあれば出れる。ピーターはどこかへ行きかねない。フェリーの時のように、死ぬこともかまわずどこかに行きかねない！」

ピーターはどきつとし、「大丈夫、もうあんなことはしないよ。日中は暑いから、散歩に出てきただけだよ」

「じゃあ、ひと言そう言ってよ！」

「ごめん、ごめん、そうするよ。でもここには至るところに監視レーダーがついてるし。それに……」

ガサツと音が。

「兵士さんたちもいるしね」

下を見やると、巡回のための兵士の姿が、オリーブの木々の間から見えた。

向こうも、ちらりと上にいるピーターを見やっている。

リンダは、ピーターの腕をぎゅっと握り、

「あの人たち嫌い。ピーターのことならむ」

「しかたないよ。僕は……」

「悔しい！」

「え？」

ピーターは、リンダの口から発せられた思いがけない言葉に驚きながらも、彼女と同じ思いでいる自分に気づいていた。

ピーターたちが遭遇したフェリーでの事件は、サップスが起こしたテロ事件のひとつとして報道されたが、死傷者がわずかだったため、他の事件と比べ大きく報道されることはなかった。

しかし、防衛隊本部では最も問題視している事件だと、ベルタがさらりと教えてくれた。ピーターもそのことを盗聴によって知っていた。防衛隊本部は、ピーター同様ステッキイの名前はわからずとも、彼が行ったハッカー行為の詳細と、そのことで大勢のサップスたちが潜入したことを把握、すぐに対応に乗り出していた。

書き換えられてしまった幾人もの個人データ。ビッツは当初、全解明を絶望視していたが、ソクラトンを中心に地球の頭脳を結集させた結果、解明が可能となった。それも想定以上に速く解明されることになった。そして、キンスキーが率いる親衛隊が中心になって、地球人になりすましたサップスたちの「駆除」を進めていった。

しかし、半分以上の「駆逐」が進んだところで、テロ事件はピタリと起きなくなった。サップスたちが表に出なくなったことで「駆逐」も進まなくなった。おそらく情報収集

をするため潜伏活動に入ったのだらうということで、キンスキーたちは情報網を強化して必死で探し続けていた。

こうした情報を逐次得ていながらも、ピーターは動けなかった。腕を負傷していたためもある。さらに「遊星仮面」なる者の再登場に、防衛隊本部で警戒を高めていたこともある。

フェリーの監視システムに不鮮明に部分的にとらえられた二人の人物は、サップスと遊星仮面なる者であり、サップスは海水に飲み込まれる瞬間がとらえられていたことから死んだものと結論づけられた。一方、遊星仮面のその後は映されてはいないが、謎の光は彼が引き起こし、彼が被ばく治療用の薬をピネロン星に届けたのであろうと結論づけられた。——そうした敵か味方かわからない人物への警戒により、ピーターを含めた事件関係者はその後も何回か調べられることになった。

ピーターは、トランクの秘密と、瞬間での空間移動を支える「孤槍システム」を見抜かれることはなかったものの、しばらくは慎重にならざるをえなくなっていた。

さらに、大がかりな引越しもあった。

地球防衛の対策に追われるソクラトンは自宅に戻れず、ベルタはフェリーでの事件以降ひんぱんにビッツの直接指令で招集されるようになり、ピーターとリンダ二人だけが取り残されるようになっていた。リンダはピーターがいなくなることに神経質になってしまい、ピーターはそんなリンダをひとり残して動くことが困難になっていった。——そんな二人の状況を案じたソクラトンは、彼らを自分の目の届くところに移動させようとしたのである。しかしその結果、ある意外な人物の意向によって、ピーターとリンダはアフリカ区に所属する地中海の孤島・ナイル島に移されることになってしまった。

ナイル島。〈逸失の日〉の前には存在していなかった島だ。

〈逸失の日〉の後は、世界各国で、特に海沿いの地形は大きく変わってしまった。消えてしまった島もあれば、切り離されるか盛り上がるかして新たに出現した島もあった。ナイル島はそうした島のひとつだ。

陸から近く、小さな船でも往航可能なこの島には、かつてピネロン人たちが大勢住んでいた。

母星ではおもに地下空間で住んできたピネロン人たちは、地球に住んでもそういう傾向があった。生活習慣の違いによる地球人とのいさかいを避け、こういう孤島を買い取って地下に大空間を作り、共同生活を行ったり、独自のイベントを行う施設を作るピネロン人たちも少なくなかった。この島もそうした島のひとつだったのだが、戦争がはじまると住んでいた人々は全員拘束。その後、地理的条件が良かったためか、地球軍の訓練施設に作り替えられてしまった。

ピーターとリンダ、そしてベルタは、施設の隅に残された住居施設に住まわされることになった。

ただ、ソクラトンは当初、ふたりをこんな軍事施設に移らせる気などなかった。本当は、自分がいる中央ユーラシアにある防衛隊本部近くの民間施設に呼び寄せようとしていたのだ。

そこに意外な人物からの横槍が入ったのだと、ベルタは語った。

「アデル大統領が？なんで！」

ピーターは驚く。

大統領みずから、大統領府のあるアフリカ区に自分たちを留め置きとの命令を入れたのだという。

そのため、ソクラトンからの相談を受けたビッツは、折衷案としてこの島を提示し、アデルからの承認を得たのだという。

「僕は大統領と会ったことなんかありませんよ、なのになぜ？」

「あんたはそれだけ重要人物なのよ」

「僕というより、僕の周辺ですね」

「……そうね。ビッツ総司令とアデル大統領とは仲良くないみたいだけど、どちらも相手を無視できないからこんな折衷策になっちゃったらしい。まあ、でもここは軍の重要基地だから、いつでも防衛隊本部から飛んでこれるんだけどね」

「……」

ピーターは、唇を噛むしかなかった。

そして、いざナイル島へ着いてみると、見事なまでに自分の監視に最適な地だとピーターは感じた。

私室以外には監視カメラが付いているから気をつけると、ベルタからは前もって言われていた。そうでなくとも駐屯する兵士たちからは常に監視され、彼らから敵意を感じることも少なくなき、息苦しさは半端なかった。

ただ倫理的統制は効いていて、直接理不尽な扱いを受けることはなかった。そのためベルタは自分の不在時に、ピーターとリンダの護衛を安心して他の者たちに頼むことができた。

じつはベルタは、ビッツから直接命令される仕事が増えたことで、ピーターとリンダの護衛任務から外されようとしていたのだ。だがリンダが頑としてそれを拒否し、任務は継続となった。

ピーターもベルタの任務継続はありがたかった。彼女がローレル島との行き来を行ってくれることで、いまだ記憶喪失状態にある母の様子を知ることができたからだ。

しかし、ベルタは複雑だった

「リンダちゃん、ここにいさせていいのかしら。あたしが勉強見てあげることができなくなってるし、同じ年頃の子たちとの交流は無いし」

射撃の練習をしながらベルタが語る。

地下の訓練場にある射撃場。ベルタは私服姿になっても、就寝の寸前までここで練習していた。

他の駐屯兵たちは、夜間は別の場所にある宿泊施設に移るが、ピーターとリンダとベルタは訓練場の中に住んでいるので、夜はひとり占め状態で訓練にいそむことができた。

そしてこの時間が、ピーターとベルタがじっくり話し合える時間でもあった。頻繁に劇音が生じるここには盗聴器がつけられていないことを、ベルタは知っていたのだ。

そのことはもちろんピーターも確認済みで、安心して思ったことを口にできた。

「僕は何度も教授のもとに行けと言ってるんですが、リンダちゃん本人が頑として拒否し

て。教授の言うことも聞かず、どうしたものかと……」

「まあソニカちゃんからの報告は、このの方がやりやすいけどね。といつても楽譜のやりとりばかりだけど。あたし楽譜読めないから、なんの曲書いてるのか知らないけど」
そう言つて、ベルタは少し考えた後、

「今回あたし、ソクラトン教授から正式にあの子の護衛も頼まれたんだけど、あの子のこ
と初めて知ったわ。本当の孫ではないのね」

「でも教授はリンダちゃんを愛しています」

「わかつてるわよ、家族だもの。そしてリンダちゃんは、あんたもソニカちゃんも家族だ
と思つてる」

「僕が？」

「そう、家族は心の支えよ。あたしだって。ほら」

ベルタは左腕をまくりあげ、裸の上肢を見せた。

そこには家族の集合写真。いや写真と変わらないほど精密に彫り上げられた刺青が。

「弟や妹たち五人と、おばあちゃんよ。あたしの大切な家族。こうやっていつもいっしょ
にいるの」

「……お父さんやお母さんは？」

「おやじは別の女性と駆け落ち、母さんは過労で死んだ。だから今はあたしが稼ぎ頭」

「……」

「なあに、よくあることよ」

そう言つてベルタは一撃放ったあと、銃を下ろした。

「今日は少し早く切り上げるわね。明日またローレル島に行くから。今回は産婦人科医を
連れていかなきゃいけないし」

「産婦人科？」

「上官のミスよ。男はダメねえ、捕虜の中には妊娠中の人もいるつてことに備えてなかつ
たのよ」

「……地球人との？」

「詳しくは聞いてない。だけどたとえ父親が地球人でも、母と子を引き離すことはしない
つて上官は言つてた。ディミトリのやり方にはみんな迷惑してたから、当然よね」

「……」

「他の収容所ではどうしてるのかは知らないけど。もしかしたらいまだに引き離されるか
もしれない。その辺の連携はとれてないのよね」

「……ここにいた人たちがどこへ連れていかれたのかも、やっぱりわからないんですね？」

ベルタはうなずき、「ローレル島以外のことはあたしにもわからない。おそらく上官にも
収容所の全体像はわからないんじゃないかな。急場しのぎで各地に乱立して作られたから、
劣悪なところもあるみたい」

「……」

「で、ここまでしかあたしには答えられないわ。なので次はそつちが答えて。今回は何を
あたしに頼みたい？」

「え？あ、ああ……録音した僕の声之母に聞かせてほしい」

「何度も言つてるけどそれは無理」

「でも楽譜ならいいんですよ？」

「また楽譜？」

「リンダちゃんが今回も渡すと言っていました。明日の朝、声をかけてあげてください」

「はあ………いったい二人でどんな曲のやりとりをしているのか。まあいいわ。今はソニカちゃんとの友情を守ってあげることしかできないしね。……あ、そういや」

ベルタは何か思い出したのか、両手を叩き、
「そういや、ディミトリの甥っ子が今度月に行くらしいけど、あんたの友だちじゃないの？」

ピーターは驚き、「レザーが？」

「そうよ。会っていかなくていいの？」

「会いにいけるんですか？」

「……あ、そうだった、そうだった、あんたの移動には許可が必要なんだっただけ。それに彼、両親が面会に来るのも拒否してるそうだしね」

「え？」ピーターは耳を疑う。「両親？」

「両親よ」

「両親なんですか？」

「……あんた何言ってるの？」

「本当に両親？」

「同僚からそう聞いたわよ。いったい何なの?!」

「彼の母親は死んでるんです、三年前に」

「へ？」

「そうなんです」

「じゃあ、再婚したんじゃないの」

父親が再婚？ピーターは驚く。

そんな話は聞いてない。ソニカからも。

もしや、叔父のキンスキー少尉に学業を中断させられ無理やり軍隊に入れられたのに、それに抗せずそのまま軍隊にいるのは、そういうことが関係しているのか？

あるいは、ソニカが拘束されるさい、何かあったのか？

ソニカも、なにかを知っているのかもしれないが、なんらかの事情があってあえて自分たちには話さなかったのか？

ピーターの動揺に、ベルタは少々驚き、

「だったら、あのディミトリがなんか変なことしたのかもね、あいつ、軍関係者もクソまじめに摘発しまくるから、一部でひどく怨まれてるらしいからね。……あ、そういえば」
ベルタはまたも何かを思い出したらしく、

「ディミトリで思い出した。この前のフェリーの事件の時、あんたを放置するってふざけたマネしやがったから後で絞めあげたら、あんたのお母さんのパソコンが見つからないのにあんたを締めあげられないからどうしたらこうたらと意味不明な愚痴を言ってたけど……わかるかな？なんか思い当たる節ある？」

「僕の母のパソコン？……え？あれはキンスキー少尉が持ち去ったんじゃないんですか？」

「どういふこと?」

「僕が駆けつけた時はすでに現場にはなかったですよ。なのにいったい……」
母のパソコンは、自宅の火事が起きる前に、もうすでにあの場になかったということなのか?

それはいったい、どういうことなのか?

(二)

「どういふことです、ホイヘンス様!先ほど兵たちに言ったことは本当のですか?」

「何がだ?」

「また打ち合わせた話とは違います」

「また?またとは何だ?」

「打ち合わせた話とは違いますっ!」

ピネロン星の成層圏付近に浮かぶホイヘンスの宇宙船内にて。

通路をつつか歩くホイヘンス。イモシは遅れまいと必死だ。

ホイヘンスの前のドアが開き、彼の執務室へと。

そして、くるとイモシの方に振り向き、

「最初から欲張るのはリスクが高すぎると、官僚どもが言ってきた」

「またレガイテめが……」イモシは小さくつぶやき、「では私の計画に疑問でも?ご同意くださったではありませんか。敵の致命的弱点をとらえたのです。だったら先制攻撃あるのみだと、ホイヘンス様ご自身もそうおっしゃったではありませんか」

「……たしかお前は、宇宙船や戦闘機のメインエンジンは、地球大気の中ではまだ一度も動かしていないと言っておったな」

「はあ?……たしかに申しましたが、それについてはご説明したではありませんか!私の科学力とスピンの技術力をもってすればと……」

「冷静に考えると、危ういと気づいた」

「ホイヘンス様!」

「わしは機械については不慣れだ。よくわからん。よくわからんことに賭け、さらに戦術に賭けるとなると、リスクはとんでもなく広がる。それに敵の戦力に不明確な点多すぎると言われては、さすがに反論すらできん」

「だからこそ!だからこそ一気に叩き、一気に奪うのです。いずれこの先、武器や船の大量生産がかなわなくなるおそれがございます。太陽系にくらべ、ピネロン・ゾーンには金属資源が少ない。いくらわれらの技術が上回っていてもこればかりは……」

「わかつておる!」ホイヘンスは電子鞭でバンと床を叩き、「だが、万が一の事態があれば損害は計り知れんのだ!わしはお前と違って、兵隊を直接動かす立場だ。兵たちとて重要な資源なのだからな!」

「ホイヘンス様……」

「なので生き残つとるサップスどもには、次回の本格攻撃のための情報を集めるようにと……」

「次回？そんなことを言っていましたら、その間に地球側が力を蓄えましょう。それならもう一度資源確保のために木星を」

「ダメだ！」ホイヘンスは大きく首を横にふり、「たしかにこの戦争が始まった頃は、まずは資源確保と、多元的な攻撃ルート作りをと悠長に構えておったがな。しかし今また再び木星となれば、もはやあの被害の後ではまず兵たちの士気があがらん。先ほどの反応を見ただろうが！」

イモシは、うつと言葉に詰まった。

先ほどまでホイヘンスとイモシは、地上にいた。

「軍用地区」のひとつに降り立っていた。

「軍用地区」とは、いわゆる軍事基地。軍事企業もあり軍人育成地もあるへハビタブルスポットのことだ。

ホイヘンスは政権掌握後、多くの「市」から住民たちを強制移譲させ、「軍用地区」を整備させていた。いくつかの軍人育成地では、ハチュンを中心とした、ホイヘンスへの絶対忠誠を尽くす少数精鋭の将校たちが、若い志願兵たちを訓練していた。

それらを回り、兵士たちを前にして、ホイヘンスは激を飛ばした。

「この大地を汚し、大勢の同胞を殺したばかりか、木星で人質となつた同胞も殺した地球人への報復の第一歩だ！」

兵士たちの反応は、どこへ行ってもすさまじかった。打倒地球の声が鳴り響いていた。

「あの勢いを利用し、一気に敵の戦意を失わせる方策をお前は練るのだ」

と、ホイヘンスは言うが、イモシは納得できない。

「ですが、そうदैいて破壊を限定的にしろとは」

「あとで資源を奪うのにインフラまで破壊してどうする！」

「そ、そりゃ……」

「私の科学力をもってすれば、などと行ってなかったか？しょせんは口ばかりだからまだわからんのではないのか？遊星仮面の正体を」

「え？あ！」

「わからんか！敵の戦力の不明確な点とは、奴のことだ！」

そう言つて、ホイヘンスは電子鞭をイモシの顔に突きつけた。

「ひ！」イモシは青ざめ、「こゝ、孤槍システム」が完成してて、それをなぜか奴が使っているとしたか……」

「それは前に聞いたわ。そもそもあいつは何者だ！ステッキイーに代わつてサップスたちの船に乗り込んできて薬を届けに来た。わしらの味方か？「孤槍システム」を使っているとすればわしらの側の人間か？しかし木星でわしらの兵を殺しまくった。わしらの敵か？……あいつは何者だ！」

「はて」

「はてではない！そもそもラフラスの下にいたのだろうか？奴らの研究内容や交流関係を知ってるはずだろうか！なのにお前、ほとんどなにも知らんではないか！」

「私は、前にも申しましたが、部下と言つても別室にハネられてたようなものですから。そもそもラフラスどもは、家族以外は寄せつけなかったところがありまして、長男の細君

に至っては、見かけがあれほど目立つのにほとんど見たことすらありませんで。何をすることもとあやつらの長男が間に入っておりましてたから」

「下心があると思われたんではないか？」

「いえ、私は妻一筋でして……ひえっ！」

ふざけるなとばかりに、ホイヘンスは電子鞭を再びイモシに突きつけた。

しかしすぐに鞭を下ろし、自問自答のようにつぶやく。

「重要な秘密を守るためだったわけか？それでもなぜ次男にだけは何も知らせなかった？あんな大がかりな力を次男に授けておきながら……。単に説明してる時間がなかったからか？それとも家族内でなにか……」

「ホイヘンス様、それでもひとつわかりかけたことがあります」

イモシが、起死回生とばかりに大声をあげた

「遊星仮面が乗っていた乗り物です。見かけは地球型なのですが、どうもエンジンなどの動きがこちらの様式のようにだとスピンが申しております。そこで気になるのが、あのレガイテの弟。メカニツクの天才でしたがこやつも行方不明でして……」

ホイヘンスの眉がピクリと動いた。

イモシは気づかず続ける。

「相当な変人でしたからな。なにを考えているのかわからず、スピンも読みきれなかったよ。ですが兄であるレガイテを締め上げればあるいは……」

「やはりヤートは必要だな！」

いきなり話題を変えるかのように、ホイヘンスが大声をあげた。

イモシは少しきよとんとし、

「あやつは、行方不明では？」

「生きてたわ。シド市に逃げ込んでおった。そこからすぐに外に飛び出したらしい。市長が報告を怠っておった」

「……なんかんやおっしやっても、探してらしたのですか」

「報告は入るはずだと思っておった。あいつはいろいろ目立つからな。——で、市長を外にほおり出して調べさせたら、あいつが身に付けてたらしい血のついた防御服と、脳波チップの破片が見つかったとのことだ」

「死んだのでは？」

「死んだのは市長だ。急性放射線障害で。手間が省けたわ」

「ひ！」

「しかし奴の遺体がないということは、あいつを保護した連中がいる。おそらくは、あいつの秘密を知ってる連中。先日わしが片付けた料理人の仲間かもしれないな」

「反体制派？では、いずれホイヘンス様を殺しに？」

「どうかな。わしに頭を下げにくるかもしれないぞ」

イモシは少し迷いながらも、意を決したようにたずねる。

「ホイヘンス様、もはやあやつのお父さんには興味ないのでは？」

「……どうということだ？」

「目的はあのクソガキ本人。いったいなにがお気に入りですか？」

「黙れ！親を釣るエサであることに変わりないわ」

ホイヘンスはそう叱咤しつつ、なにかを探すかのように外の闇を見やった。

同じ頃、闇の中――

いきなり、上部から光が差し込んだ。

狭い暗い室内が、わずかに照らし出された。上部の小窓が開けられたのだ。光が室内の人物をあきらかにした。ヤートだ。

うつろな表情だったのがすぐに正気に戻り、叫び声をあげる。

「おい、聞いているか！なんでぼくを助けた！ホイヘンスを倒すために力を貸せと言ってきた、この扱いはなんなんだ！

自分たちは、「本来のピネロン人」だと？「本来のピネロン人」ってなんなんだ！元の世界ってなんなんだ！なにも答えずぼくを利用するな！

ホイヘンスの秘密なんて知らない。科学の才なんてないから親の研究内容なんてわからない！脳波探ったってムダだぞ！拷問したってムダだぞ！それよりトロント市へ連れていけ！そしたら……」

「黙れ！」

小窓は女性の怒声とともにバンと閉められ、室内は再び闇に。

ヤートが閉じ込められている部屋の隣は、より大きな部屋だった。

壁からの光に適度に照らされた中に、ピネロン人の民間人の姿をした六人の男女が。全員、瀕死のヤートを助け出した者たちだった。

小窓をいったん開いた女性は、鼻をつまんだまま、「なんなの、あいつ！従わないなら……」

「よせ！あれでも大科学者のガキだ。まだ価値はある。それに報告が本当なら、ホイヘンスが所有する一部のメカを扱える力がある」

「それでもあんな大ケガのあとで、水しか取らないってのは、かなりヤバいな」

「殺されないってわかってるからよ！ほんと腹立つ！本来ならとっくに殺されてるはずなのに。それにしても臭いったら……」

「飢えや糞尿ぐらいじゃ根はあげないってことか。いい根性だな、仲間にできればだがな」
中からなおもヤートの叫び声が。「ホイヘンスもあんたたちも、おんなじだ！」

「黙れ！」

我慢できずに女性は、牢のドアをバンと蹴りあげた。

それと同時に、六人がいた部屋のドアが、開く。

リーダーと思われる年配の男が入ってきた。

「おい、ホイヘンスが動くぞ！」

全員立ち上がった。

(四)

「ピネロン側に何か動きが？」

「わからないけど、呼び出された。ティエン外地司令からのお誘い、さすがに今回は断り切れない」

夜中、ローレル島から帰ってきたベルタは、休むことなくそそくさとシャワーを浴び、そそくさと新しい軍服に着替えていた。

そして訓練場で射撃の練習を始める。

ピーターはパジャマ姿で、出てきていた。

ふたりはいつもながら、ベルタがゆっくりと撃つ合間合間に、会話をを行う。

「リンダちゃんは寝たの？」

「さすがにこの時間じゃ。さつきも寝ぼけてましたからね」

「ソニカちゃんからの楽譜、渡せてよかったわ」

そう言っただけでなく、深刻に無言で射撃を繰り返す。

ピーターは、破天荒な言動の多いこの若い女性軍人が、じつは軍を代表する優秀な狙撃手であり優秀な戦闘機パイロットで、「天才好き」なティエン外地司令から相当に目をかけられていることを知った。

フェリー事件で遭遇した子供たちが収容された、南米の軍事学校。ビッツの妻ミルドレッドが経営するその学校は、ティエンとベルタの出身校でもあった。ベルタは義務教育からそこで過ごし、優秀だったことから何度も飛び級。あのキンスキーと、年の差はあっても同期なのはそのためだった。

とりあえずロペスの下に置かれているものの、なにかあれば軍上層からの命令で動かされる立場。ここしばらくは、サップス「駆除」を目的とする特殊使命を受け、現にふたりのサップスをとらえたいらしい。

そんななか、急ぎよ月基地に向かわされることになったと、ついさつきピーターは聞かされた。

ピーターは心配そうに、「訓練よりも、時間があるなら少しは寝た方が。狙撃とは関係ない仕事なんですから」

「脳を鍛えるためよ。大丈夫、移動中に寝るから」

ベルタは射撃のスピードを落とし、語り始める。

「狙撃の場合なら、確実に動きを止められれば、殺さずに済むかもしれない。戦闘機からの爆撃なら、命中させればあとの犠牲を少なくできる。ただ……」と、いったん深呼吸をして「戦闘機の場合には殺さないといけない」と、小さくつぶやく。

ピーターは、ためらいながらもたずねる。

「今までに何人？」

ベルタは一瞬びつくとした。

少し迷い、ようやく言葉を発する、

「後で死んだ人のことまではわからない。ピネロン人はもつとわからない。開戦時には戦闘機からのボタンで三機落としたけど」

「……覚えてるんですね」

ベルタはそれには答えず、銃を握った。再び二、三度射撃を繰り返す。

そして、静かに手を止め、天井をぼうぜんと見上げ、

「軍事学校に入ったのは、ほとんどタダで義務教育が受けられたから。たまたま狙撃の才

があっただけで、本当は嫌で逃げ出したくて、教職の免許なんかも取ったけど、どれも中途半端。前にも言ったけどおやじが家出てて母さん死んだから、大家族を養うには軍に留まらざるをえなかった。狙撃手は給与がいいからね。お金ためてすっぱりやめるつもりだったけど、そういうわけにはいかなかった。家族を守らないといけない！」

ピーターは、再びためらいながらもたずねる。

「ピネロン人は、憎いですか？」

「……何が言いたいのか？」

「す、すみません」

「本当に憎かったら、あなたのお母さんの様子見たり、ソニカちゃんと会ったりしてないわよ。でも……」とベルタは顔を伏せ「仲間が何人も戦死してる。ギリギリもってるけど、もつと死んでいったら自信がない。家族にまで何かあれば、友だちまで憎しになってしまふかもしれない」

「友だち？」

「最近まで一緒に暮らしてたんだから、ひとりやふたり、ピネロン人の知り合いや友だちがいてもおかしくないでしょ？だから、ティエン外地司令があたしを仲間みたいに扱うのホント、むかつくのよ。あたしはあなたとは境遇似てないって！あなたやデイミトリみたいな問答無用なピネロン人嫌いじゃないんだって！」

そういつて、バンと一撃し

「ただ、民間人は関係ないといつても、例のサップスみたいなのがまぎれ混んでたら区別できない。あなたには悪いけど、軍の立場からじゃ拘束はやむをえないとしか」

「……」

「あ、時間だわ」

「じゃあ」ピーターはリンダを起こそうと、体の向きを変えるが、

ベルタはピーターの肩を握り、首を横にふる。

「それよりあなたのお友だちが、月に入ったわ」

「レーザーが？」

「最終訓練との名目。状況見て内地勤務か外地勤務か決めるようだけど、宇宙でなにかあれば最前線に立たされるかもね」

「彼だけ？」

「わけないでしょ！同期全員、わけへだてなく。ティエン外地司令、そのあたりは平等よ」ピーターはホッとした。話の内容だけでなく、ベルタの態度を見てた。

ベルタはトーカーカス星でのことはなにも知らない。レーザーとソニカの事情については、ちゃんと秘密にされていると確信した。

そんなピーターの心の中を知らずに、ベルタは続ける。

「月基地広いから、会えるかどうかわからないけど、もし会えたらあなたが元気だつて言つとく。……そーいや、例のものあなたにあげるわ」

「え？」

「あたしは使わない。つてか使えない。あたしにスパイなんてできるわけじゃないの。だから貸すんじゃないかって、あげる」

「支給品ですよ、バレたら？」

「壊れたと言えば済む。あんたがへたうつたら、あんたが盗んだって言うわ、情け容赦なくね。この取引でどう？」

「OKです！」

「……まったく、声紋変換器なんてなんに使うんだか。声変えたってなにしたらってあんたはバレルのに。でもでもまあいいわ。あんたは信用できる子だから」

「ありがとうございます」

「やめてよ、お礼はこちらから言いたいところよ。あんたたちの世話は、銃いじってるよりずっと楽しかったわ。……まったく、手を汚さないと大切なものを守れないなんて、いったいなんて時代なのかしらね」

「ベルタさん……」

「なんてね。大丈夫あたし戻ってくるわよ。リンダちゃんにもそう伝えてね。あたしには家族の生活がかかっているからね。それにもかしたら「遊星仮面」が助けてくれるかもしれないし」

「?!」ピーターは大声をあげそうになった。

「なんかね、そんな不審者がいるらしいのよ。上層部は隠すの必死のようだけど、何人も姿を見てるようなの」

「……」

「まさに不審者なんだけど、地球の味方じゃないのかって。だったらあたしも守ってくれるかもね。……あんたもね」

ベルタはそう言って、ピーターの肩をポンと叩き、去っていった。

ピーターはかたままったまま、そのまま立ち尽くしていたが、ゆっくりと歩きだす。

地上に出た。もうベルタの姿はない。

見上げると、月が明るく輝いていた。

(ここからでは月基地の盗聴はできない。ベルタさん、レザー……)

(五)

月基地――

いくつかのドームが並んでいる。戦闘用宇宙船や戦闘機などが格納されている。

そのドームとドームのすきまを、宇宙服を着たレザーたち訓練兵たちが動いていた。

クラークとピレイが、月基地に到着したばかりの彼らを引き回し、さまざまな施設の紹介をしていたのだ。

レザーはその間も、クラークとピレイが時おりチラチラ自分を見ているのを感じていた。明らかに自分を監視している。

三日間の休暇のあと、訓練兵たちはクラークとピレイに連れられ全員中央ユーラシアへと移動し、そこから宇宙船で月へ向かったが、その間も時折チラチラ。さすがに仲間たちもそのことに気づいて、少しげんそうな顔をしていた。

(もしかしたら、トーカーサス屋のことを知っているのか?)

叔父は、軍の上層部がいつさいの情報を封じたと言っていたが、本当にそうだろうか?

しかし、たとえバレていたとしても、自分はなにも悪いことはしていない。そう思い、何事もないようにふるまおうとした。

やがて――

一行の前に、少し離れたところ立つ、丸い塔のようなものが見えてきた。

訓練兵のひとりが指さす。「あれは？」

「捕虜の一時収容所だ」とクラーク

「え？」訓練兵が声をあげた。「捕虜は、あの木星戦のあと、全員地球に移動させたのではないのですか？足枷にならないようにと」

「最近捕らえた連中だ」とクラーク。

「最近？」

「火星エリアから頻繁に入り込もうとする動きがある。ほとんどは無人機だが、有人小型宇宙船もある。捕らえた奴らからなんとか情報を聞きとろうとしてるのだが……」

そしてそのまま、クラークとピレイは訓練兵たちを捕虜収容所に連れて行った。

窓のない円形の建物だ。

入ると一階には、大きな収納庫と螺旋階段があるのみ。

中に入るとクラークは、宇宙服を脱ぐよう指示する。

「中尉、それでは何かあれば危険です！」

クラークにずっと付き従うだけだったピレイが、突然反論の声をあげた。

しかしクラークは手を横に振る。

「反感をもたれては困る。服は自分のものだとの印をつけてその収容庫へ。ただし銃は持つていけ」

そして螺旋階段へと。

「逃亡を防ぐため、あえて移動は不自由にしてある」

ぐるぐる上ると収容部屋は三階以上にあった。三階は大きなフロアだ。四階は個室だ。

内部はすべて透けて見えた。マジックミラーなので向こうからは見えないのだという。フロアの奥にはベッド。その前にある床の上で、ベージュ色のパジャマのような服を来た十数人のピネロン人が、ぼう然と座っていた。

「重傷者は個室だが、それ以外はフロアに集めてある。まあ個室からフロアに出てくることはできるが」とクラーク。

「捕虜たちを一緒にしておくんですか？」「なにかはかりごとをされては？」と訓練兵たち。

「それが狙いだ」

「え？」

「よっぽど親玉ホイヘンスに忠義があるのか、あるいは怖いのか、脅しても吐こうともしない。だったら急がば回れ、北風より太陽との外地司令の指示だ。緊張は仲間にいるとそうそう長くは続かない。どんな言動も見逃さないよう、もちろん自殺も防ぐためにも、監視と盗聴システムは最大限に上げてある」

そう言いながら、クラークは手をかざした。

するとフロアのドアが横に開いた。

中にいた捕虜たちは驚いた。
クラークは、真っ先に彼らに一礼を。

驚いた訓練兵たちは、それに従い一礼し、クラークの後ろに戸惑いながらもついていった。

見ると、捕虜たちのなかに、ケガ人がひとりいた。

顔中に包帯を巻いている。

「治ったのか？」

クラークがそう呟くより早く、その包帯男は大きく頭を揺らし、口を開いた。

次の瞬間――

ピレイが彼を足蹴りに！

包帯男はドサツと床に倒れ込む。

これにはクラークも驚き、レザーは飛び出す。

「何をするんです！」

レザーは思わず、包帯男に駆け寄る。

そしてピネロン語でたずねる。「大丈夫ですか？」

包帯男は首をふり、大丈夫だと合図するが、なぜかぶるぶる震えている。

心配そうに見つめるレザー。

そんなレザーに、クラークが背後から声をかける。

「ピネロン語か……ピネロン人の知り合いはいるのか」

レザーはカツとなって振り返り、立ち上がる。

「いました。それが何か？何か問題あるのですか？珍しくないことじゃないですか！それ

より、捕虜虐待は違法です！」と、ピレイの方をにらむ。

「なにおっ！」とピレイ。

険悪な空気の中、ユーリが突然クラークに対し声をあげる。

「その通りです、中尉。ピネロン語を話せる人間なんてめずらしくありません！」

これに対し、カウチャが声をあげる。

「お前ら、いったい誰に向かって！」

いっそう危険な空気になりかけたところで――

「皆さん！」

いきなりクラークが大声をあげた。

彼は一転して、今まで見たこともないような笑みを浮かべ、状況を見守っていた捕虜た

ちに歩み寄り、流ちょうなピネロン語で話しかける。

「お騒がせしてすみません。わが地球軍の優秀な新兵を紹介するはずでしたが、ご無礼を

おかけしお詫びいたします」

と、丁寧に頭を下げた。さらに包帯男に向かって、

「部下がなにか誤解したようでも申しわけない。あとで医者をご紹介しますので」

そう言って再び大きく頭を下げると、くるりと向きを変え、そそくさ部屋を出ていく。

「ク、クラーク中尉！」

あわててピレイがクラークを追い、レザーたち訓練兵たちも、あっけにとられながらも

あとをついていった。

クラークはうしろを見ることなく、階段を下りながら、

「敵の見極めを訓練兵たちに教えるはずだったのに……お前何考えてる！」と、強い調子でピレイを叱咤する。

「も、申しわけありません。あの男の奇行に危険を感じましたので」とピレイは頭を下げる。

それに対しクラークは無言のまま階段を下り、一階まで降りると突然足を止めた。

訓練兵たちは驚き、いっせいに足を止めた。

クラークはうしろを振り返り、レザーに向かつて、

「キニスキー訓練兵、たしかに君のいう通りだ。私もピネロン語を話せる。しかし君の叔父は、ピネロン語が堪能だということもスパイの条件にしたからな」

そう言い捨て、再び前を向いて足を速めた。

レザーは、なるほどと軽くうなずいた。

「おい、レザー」

ユーリが、立ちつくすレザーに心配そうに声をかけると、

「叔父はいろいろやってるからな。逆恨みをかっでもしかたがない」

レザーは苦笑しつつ、そうつぶやいた。

それから何時間かが過ぎた。

昼も夜もない月基地では、勤務は二十四時間交代制。最近では小型の無人攻撃機による攻撃に頻繁にさらされ、緊急体制に入っていた。近日中に緊急増員がなされるとのことだ。

月基地を統括する外地司令ティエンは、トレーニング器具とコンピュータが詰まった部屋にこもって防衛指示に専念しているとのこと。そのため訓練兵の誰も、彼女とはまだ会っていないかった。

クラークとピレイの案内で基地全体を案内された訓練兵たちは、状況を知り環境に慣れ体調を整えるのが最初の仕事というティエンの方針のもと、ある意味強制的に休息をとられることになり、男女別々の部屋に割り振られた。

食べるのも寝るのも仕事とのティエンの方針のもとなのか、食事も寝室も思っていた以上に快適だった。

先ほどの捕虜の待遇もだった。食と衛生には十分気を使われていた。

（外地司令は叔父同様ピネロン人嫌いと聞いてたから、てっきりひどいものかと思つたが……）

レザーは、仲間たちとともにベッドにいた。

ずっと寝つかれずにいた。

彼は今まで、襲い来るさまざまな災禍から心を守るべく、感情をシャットアウトするために、ひたすら軍での訓練にはげんできていた。

しかし、さすがに感情を抑えることに限界が来ていることを感じていた。

（親父、あんたが悪いんじゃない。リア、あんたが悪意じゃなかったことはわかる。でもなんでソニカのことを叔父に通報した？なんで……）

心がどんどん沈んでいくところで、いきなり仲間のいびきが。

ハッと目をあげ、再び閉じる。
それでも、心はうなされ続ける。

(ピーター、連絡がないのは、オレが怒ってるかと思ってるからだろう？いや、オレは今回のことで君やソクラトン教授を怨んじやないよ。むしろソニカのために最善のことをしてくれたと思ってる。ただオレが……無力なだけなんだ。あの叔父にはかなわない。キニスキーの血にはかなわない。ただオレが……)

オレにはもう帰るところはない。オレにできることは……)

どうしても眠れない。そんな時――

いきなり爆発音が。

仲間たちも飛び起きた。

「な、何かあったんだ!」

何人かが窓に走った。

「捕虜収容所が!」

少し離れたところにある、あの捕虜収容所から火が吹き上がっている。

「な、なんで!」

すると部屋の照明がつき、大声が響きわたる。

「緊急事態!まもなく敵機襲来!敵機襲来!」

(六)

数時間前のピネロン星。

ここでも大きな爆発が起こっていた

いくつかの「市」で、同時多発的に大きな爆発があったのだ。

「反体制派のテロです。重要施設は軍が抑えているため、民間人の居住区を標的に」「地下では照明施設がダウンで、混乱が……」「作戦を止めないとなおも攻撃を加えるとの声明まで入ってます!」

宇宙船の作戦室で、部下たちの報告を聞いていたホイヘンスはぼそっとつぶやく。

「……わしを止めるためか?」

そしてにやりと、不敵に笑い、

「フン、この程度では動揺せんわ!なにがあらうと「作戦」は止めん。予定通りだ。ハチユンにもその旨を伝えろ!」

そう部下たちに指示した後、モニターに映し出された被害地をいちいち確認。

そして、いきなり部下の通信器を奪う。

「ホ、ホイヘンス様?」

「在留部隊を救助にまわす。軍はわしでないと動かせん!」

そう言っつてホイヘンスは、部下に部隊長を呼び出させたあと、自ら命令を発する。

「……以上だ。部隊の半分は警戒態勢を解くな!残りは、爆発の鎮火と負傷者の応急処置と搬送と、周辺の住民保護に回していい。被害実態は逐次報告しろ!」

在留部隊の配置をしっかりと記憶していたホイヘンスは、被害地に近い複数の部隊に、

同じような内容を次々命じる。

そして、部下を通さず自分で相手を呼び出した。

「……以上だ。まずお前たち全員すぐに「別荘」に！そしたら被害住民らを首都に避難させていい。わしへの報告と、病院や市長どもとの連絡は、移動途中ででもできるはずだ」
そこでようやく通信器を置いた。

イモシはおずおず、

「ホイヘンス様、最後の相手はレガイテですか？……」「別荘」とは？」

「連中に何かあつては困る。首都から避難させる。被害者どもの中にテロ犯が忍び込んでいる危険もある」

「ですから「別荘」とは？どこに避難させよう？」

しかしホイヘンスはそれには答えず、

「お前はぼやぼやしてないで、ご自慢の科学力と工学力で、急ぎ臨時の照明システムを立ち上げろ！」

「は！」とうなずきながらもイモシ、「ですがホイヘンス様、今回のことはゲルゴンのミスでは？肝心のテロ犯の追跡は？」

「不穏な動きがあることは、ゲルゴンからすでに報告済みだった」

「はあ！」

「不穏が常態化してて、わしも油断しておった。だがすでにゲルゴンは動いているはずだ」

その通り、ゲルゴンはテロ犯を追っていた。

六人の部下たちとともに闇の地下を進んでいた。

「地下で破壊されたのは照明システムだけです。それだけでここまで混乱させるとは…

…」「民間人をここまで標的にするとは、完全に盲点でした」と部下たち。

ゲルゴンは無表情に、

「それだけ追いつめられておるのだ。問題は、部隊長以外に秘密にしていた日程が反体制派にバレたことだ。どこかにスパイが潜んでおる」

やがて、ゲルゴンは動きを止めた。六人も止まる。

「ではここから個別行動に入る。この上にちようど空母四隻がある。四人はそれぞれの艦にひそかに潜入し、部隊を見張れ。中に潜んでもかもしれないぬスパイをあぶりだせ！」

すぐに四人は離れた。しかしあとの二人は戸惑っている。

「何をしておる！」とゲルゴン。「シード、バウル、ぬしらは先の四名や、在留部隊と官僚どもに付けた者どもとは使命が違う。空母二隻にそれぞれ正面から堂々と入ればよいのだぞ」

「しかし団長、今この星はそれどころでは……」「われらもテロ犯を追わないと」

「心配無用！」とゲルゴン。「遊星仮面を間近で見たのはぬしら二人だけぞ。ゲリラ兵と共に地球に潜入し、不確か要素である奴を探し出し、正体を暴き出せ！」

「は！」「は、はい」

しかしシード、バウルの二人はなおも戸惑っている。

「団長、確認ですが、ステイツキイーは探さなくとも？」とシード

「奴の代わりに薬を届けにきた、との遊星仮面なる者の証言を信じていいものか、われら二人はずっと悩んでおりまして……」とバウル。

「ゲルゴンは目を閉じ、「もはや奴の生命反応はない……」
そして深呼吸したあと、

「奴はこの世での使命を果たした。あの薬は役立っておる。ただ遊星仮面なる者の正体がわからぬ以上は、閣下の思惑は果たせぬ。それに……ぬしらの使命はそれだけではない。例のスタンプリ銃は持つておるな」

「は」「はい」

「前回、遊星仮面をみすみす逃したミス挽回するまで、この地に戻るでない！」

「は！」「は、はい」

ゲルゴンは二人が去ったあと、懐から左手で何かを取り出した。

スティッキイーの壊れたスティックの先だ。

ゲルゴンは目を閉じ苦しげにぎゅっと握りしめたが、さっと足元に投げた。

そして右手をスティックに差し出す。すると手から光が放たれ、瞬時にステッキは溶けた。

見つける瞳は悲しげに、それでありながら憑き物がとれたような表情に。

そして、気持ちを切り替えるように、両手をぎゅっと握った。

再び目を閉じ、右手の人差し指を眉間に当てた。

テロ犯を追う部下たちに思念を送るために、その場に立ち尽くす。

そして地上では――

防御服を着たヤートが、目を見開き立ち尽くしていた。

目の前にはへハピ・パブル・スポットの巨大な壁。

「何を……したんだ……」

へハピ・パブル・スポットの中から、空に届くかのような煙が吹き上がっていた。

「これで、ホイヘンスの動きを止めようと……?」

ぼう然とつぶやくヤートの横には、同じく防御服を着た男女二人が。彼を監禁していた反体制派組織のメンバーだ。

女が答える。「このままでは奴は地球へ侵攻する。それを止めないと」

男が答える。「奴のためにまた大勢が死に、大勢が巻き込まれる。それを止めるための警告だ」

「そのために、なんで自国の民間人を……」ヤートはつぶやき、そして叫ぶ。「彼らは関係ないじゃないか！」

「関係なくない！」と男。「あいつらがホイヘンスを支持するからだ！あいつらがわれわれの地下世界を潰し、大量虐殺を引き起こしたのだ！」

「は?」ヤートは絶句し、「何を?意味がわからない!」

「あんたが知らされてないだけよ」と女。「おぼっちゃま育ちのあんたは、都合のいい歴史しか教えられてきてないのよ」

「はあ!」とヤートはさらに絶句。「歴史?ソレと今生きてる人の命とを比較する?……」

つと思つてたけど、あんたら正気じゃない！」

「私たちは正気よ！」

「正気じゃない！第一ホイヘンスをこんなことで止められるはずがない！」

「だまれ！来い！」

男はヤートの腕を取り、横に止めていた、略奪してきたらしい「車」にむりやりヤートを乗せる。

女が運転。ヤートは後部座席に。

横に座った男に、ヤートはたずねる。

「どこへ連れて行くんだ」

「レム第一軍地。ホイヘンスがご丁寧にも自分の名前をつけた最大軍事基地。今、空母四隻が集まつてる。まもなく出発予定だが、そこにも爆破要員を送つてる」

「……なんでそんなこと知ってる？」とヤート。

「志ある者はどこにでもいる」

「……スパイ！」

「今頃強力な爆弾で、壁が崩されてるはずだ。お前の特別な力を借りることはないかもしれないが」

「車」は^へ死の砂漠^の上を飛び続けた。

やがて、新たな^へハピ。パブル・スポット^のが見えてきた。

レム第一軍地らしかったが、

「え?!」

女が声をあげた。

「どうした!……あ?!」

続いて男が声をあげた。

軍事基地の上に、なにかが上がつている。

「まさか、空母が!」

近づくと、それは確信に変わつていった。

たしかに壁は一部崩れているようだ。しかしそれ以上に、その上に上がった大きな二つの物体が圧巻であった。

「国民の命はどうでもいいのか!そこまでしても地球を攻めるのか!」

絶望に近い男の叫びの中、二隻はどんどん上空へと上がっていく。

さらに別の一隻が、新たに中から浮かび上がってきた。

(あれが空母?)

ヤートは、もとは宇宙空間で暮らすために開発されたものだと、それを軍事用に改良したのだと、イモシがちらりと語っていたのを思い出した。今ホイヘンスが滞在している宇宙船も、もとはそういうものだ。

それは事実だと、ヤートは確信した。今日の前で見ている空母の形には見覚えがあった。

ピネロン星では、地上や地下で住める場所が限定されている。地球からの多くの移民を受け入れる上でも、新たな居住空間が必要だった。それを宇宙空間に求め、設計・開発された数多くの大型宇宙船。それらは、母と父も含めた科学者たちが総動員で取りかかったものだった。兄夫妻とともに見に行つたことを思い出した。

(それだったら……)

だったら、ホイヘンスのいる宇宙船同様、自分が操作できるように両親がひそかに作り替えている可能性は強い。

そうヤートが確信する中――

いきなり運転席から大声が！

「逃げろ！ サップスどもに待ち伏せされた！ 連中そちらに向かっている。うわっ！」
音声はそこで途切れた。

「ちよっ、ちよっ！」

女が何度も問いかけるが、不気味な機械音が響くだけ。

男は青ざめ、

「ヤバイ。逃げろ！」

「い、嫌よ！」 女は拒否する。「ここまできてー！ それに仲間を助けなさい！」

「もう遅い！ サップスに襲われたらひとたまりもないんだ」

二人が言い争う中、軍事基地からは、それまでの三隻とは異なる巨大な船が上がってきた。

巨大な上に、ピネロンマークを表す十字のマークが大きく描かれている。

上がったまま、そのまま動かないでいる。最終調整しているようだ。

ヤートは賭けることにした。「今すぐあの船と連絡とれないか？」

「は？」

「おそらくあれに司令官クラスが乗っている。だからあの船に伝えるんだ。ぼくを捕らえた。と。うまくいけばあんたたちは、サップスからの攻撃を逃れられて、あの船に乗りこめる」

「なんだと！」

「ぼくの名前と、「両親の居所がわかった」、そして「孫悟空」と、この三点をそのまま言うんだ。そしてそれをホイヘンスに伝えろと」

「はあ？」

「急いで！ あの船が止まっている間に！ きつとぼくはあの船を操れる。急げ！」

「わ、わかったわ……」

女は、「車」にとりつけられた伝導周波数を操作する。

しかしなかなかうまくいかない。

そんななかで――

バーン！

車の側壁が破壊された。

「まずい！」

どこに潜んでいるのかわからないが、サップスによる攻撃がはじまった。

バーン！ 再び側壁。

「つながった！」と女。

すぐに通信を行う。「ホイヘンスに伝えて。重要な人質をとった。こちらにはラフラス・

ヤートがいる。両親の居所がわかったと。それに、ソン、ソン……」

「孫悟空だ！」

ヤートは、後ろから大声で、

「ホイヘンスにこの声を伝える！ぼくはラフランス・ヤートだ。孫悟空だ。両親の居所がわかった。しゃべる条件はひとつ、その船に入れる！入れるんだ！」

再度車の側壁への攻撃はあったがそれだけで、すぐに攻撃は止まった。

「マジか！」と男は驚く。

「突っ込むんだ」とヤート。

「了解！」

女は「車」をそのまま、十字のマークのついた空母へと。

しかし、つるりとした船体、どこに着ければいいのかわからない。

すると、大きな口が開き、何の抵抗もなく、「車」は船内に吸い込まれた。

そこは、暗いがらんとした空間。まわりを見わたす三人。

しかしすぐに、バツと照明がついた。

三人は、自分たちの「車」が、銃をもった兵士たちに囲い込まれていることに気づいた。男はあわてる。

「お、おい、ヤート！」

「大丈夫だ、床に触れられれば……」

三人は手をあげたまま、「車」の外に。

ヤートは即座に、床に触れようとするが――

その前に、いきなり頭に異物をかぶせられる。

「ええっ！」

以前自分の力を封じていたヘッドギアと同じものだと、瞬時に察した。

そして――

「ムダだ！」

その声は！

「ホイヘンス！」

「久しぶりだな、ヤート。孫悟空になってはもうお前の力は通じない！」

船内に、ホイヘンスの声が高らかに響きわたった。

青ざめる反体制派の二人。

ヤートは、悔しさに唇を噛む。

(七)

地球、月基地――

大気がないためすでに炎は消えているが、至る所で破壊の痕跡が。

現在は、地球人兵士や技術者たちが走り回っているだけである。

戦場は、少し離れた宇宙空間にあった。

ピネロン軍の巨大空母と、地球側の戦闘機とのにらみ合いが続いていた。

そんななか、月基地の広い作戦室。

訓練兵全員と、少尉以上の兵士五名と、そして彼らの前にはティエン外地司令。

腕を組んで目をつぶっている彼女は、誰よりも小柄ながらも誰よりも迫力があつた。

「外地の被害状況は……」と兵士のひとりが声をあげると、

「短く正確に！」とティエン。

「て、敵空母攻撃による月基地、および火星基地攻撃によっての物的被害は大きく四点。〈火星防衛膜〉の一部破壊、〈防御ラケット〉発射装置の全壊。月基地と火星基地と地球とを結ぶ通信網の全壊、捕虜収容所の爆破」

「収容所爆破は空母攻撃の前よね」

「あ……はい！そして人的被害は、月基地では負傷者数命ですみましたが、火星基地では半数が絶望的。現地に到着した戦闘機から、先ほどそう連絡が入りました」

「……火星基地からの連絡が届かなければ、こちらにも相当の死傷者が出ていた」とティエンは唇をかみ、「で、捕虜の遺体の数は？」

「焼け焦げてますが、数は合いました」

「了解。次に敵情報を訓練兵に説明を！」とティエン。

「敵空母は合計四隻。火星基地と当基地にピンポイント攻撃を行い、二隻が一気に地球へ侵入。残り一隻は火星に、あと一隻はこの月基地付近に停留中。この二隻はどちらもいっさい動きを見せてません。現在わが軍の戦闘機が監視を続けています」

「地球での状況は依然？」

「不明です」

——小さな悲鳴があちこちから漏れた。訓練兵たちはみな絶句し、青ざめた。

「おそらくは月基地付近にいるデカいのが四隻のトップ。火星にいるのは後方支援と帰路確保が目的」とティエン。「敵は地球攻撃だけが目的。初戦だけに徹底的に弾を節約しムダはいっさいしないつもりだ。宇宙に待機してる二隻は、地球での状況次第で動きを決めるはず。この月基地を全壊させる弾を残すかどうか、地球での状況次第でしょう」

「外地司令！」カウチャが我慢しきれず声をあげた。「なぜ今攻撃しないのですか！地球が攻め入られてるのに！月基地の戦闘機はほぼ無傷なはず！」

「……一部は火星に送らざるをえない。空母の監視だけでなく、ワームホールからの新たな侵入を防ぐためにも」

「あ！」

「なにより相手は空母。中から戦闘機を出してくれば、数少ないこちらの戦闘機だけでは到底勝ち目はない。連中はそれを知ってるから余裕。防御能力を失ったこの基地を壊すのは後でいいとすら思ってる」

「そ、そんな……」

「まったく！」とティエンは頭を乱雑にかき、「ここまでの徹底的なピンポイント攻撃、奇襲攻撃を可能にしたのは、こちらの内部情報が漏れたことに他ならない！——で」

ティエンはバチツと目を開いた。

「クラーク中尉、ではキニスキー訓練兵が敵のスパイだと？」

「疑いがあるのです。なぜなら……」

レザーは、上肢と胴体を縄で縛られ、他の訓練兵の前に座らされていた。

ピレイが横で、彼に銃口を向け待機している。

レザーに睨まれながらも、クラークはまくしたてる。

「まだ民間人だった頃、彼はトーカサス星で地球軍を混乱させました。地球を危機に陥らせた犯罪行為と言ってもいい。捕虜交換の場に向かう輸送船に紛れ込み、ピネロン星に送還されようとしていたピネロン人の恋人を奪回しようとした騒ぎを起こした」

レザーは無言だったが、彼の後ろにいる訓練兵たちからはどよめきが、クラークは続ける。

「別の不審者の乱入などで、そのもくろみは阻止されますが、いつのまにか恋人ともに地球に戻ってきていた。そこにピネロン側のなんらかの意図が絡んでるかもしれないのに、帰還の手段もその理由もきちんと調べないまま、彼の叔父であるキンスキー少尉は自分の特権で事件を闇に隠し、こいつを軍に入れ紛れ込ませ、何事もなかったかのように……」

「違う！叔父はオレ、いや私を罰するために！」

「それこそ特権乱用ではないか！」

「う……」
「こいつの恋人は今ローレル島に囚われている。彼女を救うためにスパイをしていたと判断できるのです」

「違う！」

「そうか、やっぱりお前は！」レザーの後ろから、カウチャが叫んだ。「やっぱりお前は非国民だったんだ。俺の父親を殺したピネロン星に味方するなど！」

「違う！」

「どう違うのだ！」

ざわめくなか、

「うるさい！」

ティエンの怒声に場はずまる。

「クラーク中尉、時間がないので私が調べる。キンスキー訓練兵、これは何？」

ティエンが懐から出したのは、レザーが常に大切に持っていたソニカの楽譜。

「え！え！なぜ！」

仰天し、すっかり取り乱すレザー。

ティエンは表情を変えず、

「私がすったのよ。さつき君とすれ違った時に」

そういえば……とレザーは思い出した。

しかし、ほんの一瞬だ。

「私のガキの頃の生業よ」

「え？」

「そんなことはどうでもいい。君のデータは見ている。君は楽譜を読む趣味など持ってない。これは彼女のものね？」

しかしレザーはなおもぼう然としている。

ティエンは大声で、「キンスキー訓練兵！」

「あ、はい、その通りです」

「写真や文面なら検閲されるだろうけど、楽譜なんて読める人少ないし、意味もないとしてスルーされたでしょう。それを利用して何を？」

「違います!」

レザーは立ち上がろうとするが、ピレイに抑え込まれ、やむなくその場で反論する。

「利用などしてません!楽譜は写真代わりにすぎない。それに彼女は恋人じゃない。単なる幼なじみで、私が一方的に思いを寄せてるだけです」

ティエンはじろりとレザーをにらみ、

「今はピネロン人は敵。わかってる?」

「はい」

「私はピネロン人など大嫌い。それもわかってる?」

「はい」

ティエンはふうとため息をつき、表情を緩めた。そしてクラークに向かって、

「クラーク中尉、トーカサス星でのことは、彼の叔父であるキンスキー少尉から直接私も報告を受けている」

「え?」と、クラーク。

「だから聞きたい」とティエンはレザーに向かい、「君はなんで軍に留まってる?」

「え?」

「君の叔父は無理やり学校をやめさせて君を軍に入れた。ひどい話よね。でもなんで君はそのまま軍にいる?罪に問われることがなかった時点で軍を辞めて、学校に戻ることもできただけです」

「それは……」

「もしか、トーカサス星でのことをこのクラーク中尉らにチクった実家に帰るのか嫌だったの?」

「え?」とレザー。

「ええっ?!」とクラーク。

「それとも、クラーク中尉の言ったように、ピネロン側に……」

「地球を守るためです!」

レザーはきつぱりと言い切った。

「実家に帰るのが嫌だったのは、事実です。ですがそれ以上に、この地球を守りたいと思っただけです。地球人としてだけでなく、彼女が今いる地球を」

「じゃあ彼女がピネロン星に戻れば、ピネロン星を守るの?」

「ありえません!彼女の故郷は地球。地球が破壊されて誰より悲しむのは彼女だからです。オレは彼女のために、地球を是非にでも守りたいのです!」

場は一瞬沈黙。

しかしすぐにカウチャの怒勢が。

「ふざけんな!なにをわけわからないことを言ってるんだ!」

しかし――

「静かに!」

ティエンはそう叫んで目を閉じ、命令する。「縄を解け」

「え?」とピレイ。

「命令だ!縄を解け!」

レザーは縄を解かれた。

「立ってよい！」

レザーは困惑しつつ、立ち上がった。

ティエンは目を開き、レザーに向かってわずかに笑みを浮かべ、

「よくわかった。君は甘い。故郷を知らなくても、自分の出自の地を故郷とする人間はわんさかいる。少なくとも私が知ってるピネロン人はそんな連中ばかりだった。でも……君がウソを言っていないこともよくわかった。トーカサス星からの君たちの謎の帰還は、おそらくは私たちが目をつけている謎の人物のしわざ。それが事実でしょう」

「謎の人物？」

「そしてもうひとつの事実を言えば」と、ティエンはクラークの方を向き、「クラーク中尉、たしか君の父上は、キンスキー少尉によって不正を暴かれた東ユーラシア区の兵站局長だったわね」

「え？」レザーはクラークの方を向いた。

クラークは凍りついていた。

ティエンはクラークに、さらに続けて言う。

「そして君はここへ来る寸前、東ユーラシア区へ行ってキンスキー訓練兵の実家をたずねた。そこでいろいろ聞き出した」

「外部司令、それは違います！私は東ユーラシア区には行っていません！」

「そう、行ったのは君じゃない。それぐらいID時計の位置情報でわかる」

「え？」

「その者は、ほんの一瞬だけど映ってた。映像が奇跡的に機器破壊前にこちらに届いた」と、ティエンはピレイを見やり、「ピレイ少尉、なんで捕虜たちを殺した？！」

「え？」「えー」「ええっ！」

その場にいた全員が仰天し、いつせいにピレイを見た。

ティエンは続ける。

「いや、君はそもそもピレイ少尉じゃない！」

ピレイは目を見開き、その場に立ち尽くしていた。

「これも奇跡かしらね、地球との通信が破壊される直前、正式に連絡が届いたのよ。ここにいるピレイ少尉は偽物だと」

特に驚いたのはクラーク。

「ど、どういうことです！」

「クラーク中尉、気づかなかった？」

「わ、私は先月ここに赴任するさい、初めて会ったばかりで……」

「なるほどね」とティエン。「本物のピレイはもともと開戦前にはピネロン星にいた諜報員。諜報員は「偽装可能枠」で登録され、特例として本人の容姿などが登録内容とが合わなくてもいいとされてる。ピネロン星から奇跡的に逃げ帰れたことになってるけど、その時にはすでに入れ替わってたのね。」

諜報員から外地任務に変わった時、当然特例措置は外され、すっかり本人かどうかの確認はなされるべきだった。でも混乱のせいか怠慢のせいか知らないけどその作業がなされ

ないまま、ニセのピレイがそのままうごめく結果となってしまう。少なくともまわりが容姿の違いなんかで気づくべきだったけど、諜報員のほとんどが帰国できず、それ以外ではくわしくピレイを知る者はおらず、おまけに本人は身寄りがないときてる。それをお前は利用したわけね。

月基地に来てから私が忙しすぎて人事を本国任せにしまったことも災いした。で、訓練兵たちが来るさいついでに最近部下になったクラーク中尉やピレイのデータを確認してたら、おやあ、ピレイの顔がなんか違う。その一方で、捕虜の中にどことなく本人に似た顔がある。あれえと思つて、本国に確認を要求していたのよ。ところが相変わらず本国政府は無能すぎて、結果が届いたのがついさっきだったってわけ。

本物のピレイは、事前に火星基地破壊のためのなにかしらの協力をさせられてた。そこを偶然たまたま私たちが捕まえてたんでしょね。あのケガはこちらの攻撃から受けたのではなく、ピネロン側からの口封じでしょう。かわいそうに、喉まで潰されて」

「え？」とピレイ。

「お前は攻撃対象とするモノの情報ばかり探つてた。この基地に来て一度、クラーク中尉とともに火星基地に行かせてるから、その時なにかしらの工作をしたんでしょね。でも捕虜の詳細までは調べていなかった。本物のピレイが混じつてたんで焦つたんでしょね。が、なにも収容所を破壊して口封じまでしなくても、すぐにはバレなかったんだな」

「……」

「本物のピレイは、いろいろ脅されて、それでも地球に送還されれば素性を明らかにできると考えてたのかも。察せられずに悪いことをした」

ティエンは言いきつて、いったん深呼吸をし、

「怪しいと思ったら即拘束すればよかった。この点は私の痛恨のミス！」

「ま、待つてください」とピレイ。「私にはピネロンマークは……」

「そんなもんいくらでも偽装できるでしょうが！」

ティエンが両手を叩くと、背後から銃を構えた兵士たちが飛び出し、ピレイのまわりを囲んだ。

ニセのピレイは観念したのか、銃を取り出し、

「待て！俺はサップスだ。俺は手出しすれば……うがあ！」

ティエンは問答無用に彼の顔を蹴り上げた。

そして兵士たちに命令する。

「大丈夫、そいつはサップスじゃない。サップス侵入前に入ってきた諜報員。本人データが改ざんされてなかったのはその証拠。残念だったわね」

ニセのピレイはそれで観念したのか、ティエンをにらみつけ、

「地球人め、悪魔の兵器で仲間を殺した！お前たちを殲滅するためなら俺は……」

「長い間地球にいたのに、情も湧かないなんて、ピネロン人らしいわ！……連れていけ！」
ティエンの指示にしたがい、ニセのピレイは連行されていった。

クラークは、頭を抱えて座り込んでしまっていた。

ティエンは、うなだれたままのクラークの肩をポンと叩き、レザーのもとに歩み、

「キニスキー訓練兵、これ返すわ」

そう言つて、ティエンは楽譜をレザーに返した。

「え？」

「動機はどうでもいいから有言実行。地球を守れ！」

ティエンはそう言つて、レザーの肩をポンと叩き、訓練兵の前に立つ。

「訓練兵諸君。地球から援軍を要請してたけど、到着は絶望的になった。なのでこれから君たちも実戦に向かつてもらうことになる！」

レザーはハツとなって振り返り、立ちあがった。

(八)

地球――

至るところから警告音がこだましていた。

世界規模での避難指示。各地にもうけられたシエルターへの緊急避難が呼びかけられていた。

ピーターとリンダがいるナイル島もあわただしくなっていた。

兵士たちがいなくなっていく。

ピーターとリンダは、地下のがらみどうの空間の中にいた。

「おじいちゃまたちは大丈夫かしら。ローレル島も」

「どちらにも頑丈な地下施設があるから大丈夫だよ」

――とは言ったものの、ピーターも大丈夫だとは確信できなかった。

ピネロン軍の空母二隻が突然地球に侵入。あわてて攻撃を加えようとした地球側の戦闘機のほとんどを撃墜。

現在空母は別々に地球上空を動き、それぞれを戦闘機が追尾している状況。一方月基地からの連絡は遮断され、宇宙での状況がつかめない。――そういったことをピーターは、防衛部本部ビル内からの盗聴で知った。

大型輸送船で月基地に行くはずだったベルタが、急ぎよ空母追尾の任務に変えられたことも知った。

彼女の身が心配であった。月基地にいるはずのレザーの身も。

(今の僕ならなにかできるはず。でも……)

リンダをひとりだけ残していくことはできない。

ピーターはリンダに寄り添うため、彼女の部屋に持ち込む荷物をとろうと、自室に入っていた。

そんな時――

室外から、兵士たちの騒がしい声が聞こえてきた。

「極地・海洋区司令からの指示だど？」

「調べたらこいつら「偽装可能枠」で登録されてるんです」

「諜報員なのか？」

「ここに監禁してるガキどもを監視するためだと。同じく極地・海洋区から来ていたグラナド軍曹の代わりだと言ってます」

ピーターはそつとドアを開け、外の様子を見て、仰天した。

(あの人たちは！)

そこにいたのは、あのパイクとマック。さっぱりとした背広を着ているが、胡散臭さはぶんぶん漂っている。

「そうなんですよ」とパイク。「ここにいる皆さんは、これからお国のために出動と聞いてます。おそらく誰もいなくなりますから、私どもが代わりに」

ピーターは、二人の名前は知らないが、顔は覚えていた。フェリーでの事件で、自分を「遊星仮面」と呼んだことを忘れてはいなかった。

兵士たちはなおも警戒を解かない。うさんくさそうに駐屯部隊隊長に対し、

「本部に問い合わせてください。監視をすりぬけたスパイが月基地に潜入していたとのことで、現在、軍閥連機関の監視を厳格にするよう通達が出ております」

しかし駐屯部隊隊長は、

「いや、筋は通ってる。現在本部にはなかなかつながらないし、なによりそんな時間も無い！」

そう言っつて、さっさとピーターたちの護衛をパイクとマックに頼み、部下たちとともにその場をあとにする。

パイクはニヤリと笑い、

「いやあ、軽いな」

「ウソも方便」とマック。

「滅相もないこと言うなよ。ウソは俺たちが軍人じゃないだけだ。連中、ガキどもの世話を考えずにすんでせいせいってのがミエミエだったぜ」

「しっかし何が目的かな。あにいに命令出してる人。ID時計にノイズ入れさせたり、木星から映像をピネロン星へ送らせたり、フェリーに潜入させたり……」

「フェリーの時は違う。ありゃ俺らの自由意志だ」

「あ、そうだったな。俺覚え悪くて……。確認なんだが今回はガキどもの監視と保護だよな」

「ガキと言っつても、ひとりにはピネロン側の重要人物の身内だ。しかもハーフだから特に要注意ってとこだな。もうひとりはあのソクラトン教授の孫っていうんだが、どうもそれだけでもないようなんだよな」

(なに言っつてるんだ、この人たちは。……ロペス中尉のことか？リンダのことも何か？)

ピーターはもう少し彼らの話を聞こうとしていたが――

ドオオオン！

突然大きな揺れと爆音。

それが何度も響く。

「な、なんだ！」とマック。

「敵からの空襲か？早いじゃねえか！」とパイク。

「さっき出ていった奴らは？」

「こりゃ全員、おダブツだよ！」

そんな時――

「ピーター！」

リンダが自室から飛び出してきた。

そしてパイクとマックを見て、ぎよっとする。

「だ、誰！」

「大丈夫だよ、このおじさんたちが守ってくれる」
続いてピーターが、部屋から飛び出した。

「は？」「はあ？」

仰天するパイクとマックを前に、ピーターは頭を下げる。

「お願いします。リンダを頼みます！絶対に守ってください！ここは頑丈なシャルターですから、中にさえいれば安全です。そして僕の警護は必要ない。ロペス中尉に伝えればそれは理解していただけます」

「はあああ！」とマック。

「な、な、なんでそれを！」とパイク

「そして、僕の母とソニカを守れとも。ふたりに何かあればあなたを絶対に許さないと
も！」

ピーターはそう言うと、自室に入った。

「ピーター！」

リンダが部屋に入ると、彼の姿はなかった。

トランクもなくなっていた。

あたりには、空爆の音がなおも響きわたっていた。

空爆は、中央ユーラシアでも――

防衛部本部ビルの地上部分は崩壊寸前になっていた。

しかしビッツは、寸前に地下シェルターに移動していた。

そこにはソクラトンもいた。

ふたりが立って見つめるリモート画面には、ニックの姿が。

ニックの後ろには、自身のID時計と通信しながらそれぞれのパソコンに入力している
兵士たちがずらり。

ニックは別室で、情報管理を仕切っているようだった。

彼は自身のパソコンも見ながら、

「今のところ攻撃を受けたのはここを含めた軍事拠点。どこも重要兵器の多くはギリギリ
地下へ避難できたようですが、それでも……。いや、なによりも人的被害が無視できない
状況です」

「うむ」

「あと教授、ご安心ください、たった今、ロペスより報告がありました。リンダちゃんと
ピーター君は地下にいて無事だったそうです」

「おお！」

ソクラトンは緊張から解放されたように、崩れるように椅子に座り込み、手を組み目を
閉じ、「神よ」と小さくつぶやく。

「教授！」ビッツは心配そうに、「さすがに寝てください。きのうからずっと……」

「いや、もう大丈夫じゃ。ピーターとリンダが助かったとしても、それ以外の者たちは…

…」そう言ってソクラトンは立ち上がり「ニック君、続けたまえ」

「わかりました。では」とニック。「敵空母二隻の攻撃対象は、今のところ軍事拠点のみ。それも空母からの直接攻撃のみ。現在はこちらも攻撃をやめ、大都市上空を選ぶように移動しておりますが、どこへ向かっているのかわからないと」

「無差別攻撃が目的ではないようじゃな」とソクラトン。

「今のところは。ただ上空を通過された都市ではパニックがおさまらず、心理的にわが方にダメージを与え続けております。現地の内地軍は治安に手をとられてるような状況です……」

「混乱を放置するとまだ残つとるサップスどもが動くかもしれない。さらに大都市上空で攻撃すると被害が莫大になる」とニック。「こちらがうかつに手を出せないことも計算に入れたか？ 戦闘機を出してこないのも不気味だ」

「おそらく」とソクラトン。「地球大気内での初めての運用になるため、機器がうまく動くかどうかの情報を、まずは丈夫な空母を使って探っておるのじゃろう」

「では今後どう動くかはわからんわけか」とニック。「空母は二隻のままか？」

「今のところは」とニック。「木星戦線の時も驚きましたが、重力対策がしっかりできており、地球の技術者を統括できるよほどのスペシャリストが手がけたものだ」と

「感心してる場合ではない！」とニック。「月基地からの最後の通信は、まだあと二隻来ているというものだ。命がけで侵入を阻止してる最中だろうが、時間の問題だろう」

「それら後方機も情報も集めていましょう。私も教授がおっしゃったように、初めての地での実践となるので、兵站も考え、兵器の使用を今のところは抑えているものと思いません」

「武器の手の内も見せたくないのだろうな。もう少し情報が手に入ればいいのだが」とニック。

「個人通信での情報収集には限界があります。待機要員のID時計のもとに次々連絡が入っておりますが、情報にムラがありすぎて、総合判断に時間がかかり……」

「くそ！」

ニックはいきなり大声をあげ、机をバンと叩いた。

「敵は、いまやわれらが隠し続けてきた弱点を知ってしまったのだ。空中に浮遊するエキゾチック・マターの影響で、電波の流れが阻害されてることを！ ひそかに月基地経由でその弱点を補っていたことを！」

〈逸失の日〉以降の地球の目覚ましい復興を後押ししてくれた、ピネロン星からの贈り物、エキゾチック・マター。

しかし、地球にとつてはあくまでも異物であった。かつては重力の狂いが出て人体に影響が生じていた。徐々にそうした被害は減ったものの、まんべんなく大気中に漂ってしまったためか、電波を使った通信に甚大な影響を及ぼすことになってしまった。

ピネロン星では、エキゾチック・マターを脳波を使った特殊な通信に利用していたが、同じことは地球上ではできなかつた。地球上でというより、地球人にはできなかつたのだ。ピネロン人の脳波と地球人の脳波とはわずかに違うために。

ともかく地球は、〈逸失の日〉以前の世界には戻れなくなってしまった。

問題なく使える波長が少なくなってしまうことで、かつてのような自由な通信はできなくなってしまう。使える波長は、ID時計を使った個人管理と、パソコンを使った国民管理システムに優先させて使った。経済活動や警察や軍の活動のためには、エキゾチック・マターの影響が及ばない宇宙空間へ——地球防衛膜までいったん飛ばして瞬時に電波を補強し、それを瞬時に地上に送り返して地上での通信を一見不自由ないようにしていたのだが、その補強の度合いをコントロールしていたのが月基地だった。

そうした重要な機能が、月基地攻撃でほとんど失われてしまった。

「ティエンが最後に言っていたスパイのしわざか……」とビッツ。「サップス侵入以前にそんな大物が入っていたことを見抜けなかったとは…。」

月基地を破壊されては、この地球は前近代に戻ったようなものだ。地球外での状況がいつさいわからなくなり、敵の侵入にも気づけず、地上での連携は阻害され、すべてを現場にまかさざるを得なくなるとは……」

うめくビッツ。

そこへ、ニツクから大声が。

「総司令！ たった今連絡が入りました。二隻の空母とも止まったと。ジュネーブの情報基地と、大統領のおられるアースシティの上空に。さらに……」

「どうした！」

「どちらの空母も戦闘機を出してきたもようです！」

「なんだと！」

「どちらも軍事基地ではない」とソクラトン。

「なにを狙って……ま、まさか！」

ビッツは青ざめた。

(九)

アースシティ——アフリカ区にある現在の地球首都。

かつてエチオピアという国があったという高地に築かれていた。

首都と言っても、人々が暮らす集落からは離れた陸の孤島のようなところに、舗装された道路とわずかな低い建物があるだけ。現在のアデル大統領が、行政機関のごく一部を引き連れ西ユーラシア区から移ってきてから、まだ十年もたっていないかったためだ。

そうした人気のない首都上空で、地球側の戦闘機とピネロン側の戦闘機との死闘が開始されていた。

「早！」

地球側の戦闘機の中には、メガネをはずしたベルタの姿も。

敵の攻撃をかわしていきながらも、驚いていた。

地球大気の中での初めての実戦のはずなのに、ピネロン側の戦闘機の動きは速く、地球側を圧倒していた。そのため、同じようなレーザー砲の攻撃でも、わずかなスピードの差で地球側の劣勢を招いていた。

それでいて敵の攻撃は防御優先、地球側の戦闘機をかく乱し、ふり払うことを優先させ

ていることにベルタは気づく。

さらに――

「なに?!」

戦闘機からなにかが振り落とされている!

しかし、それがなにかを確認することはできなかった。別の戦闘機が絡んできたからだ。そんななか、ベルタはあることに気づく。

通信をONにし、

「みんな聞こえる?!連中着陸したがっている!大統領が危ない!」

受けてすぐに声が響く。「グラナド軍曹、勝手に命令するな!ここでは……」

次いで聞こえてきたのは爆音。

爆音は他にも響く。地球側の戦闘機の被害だ。

上空の空母からの直接攻撃も加わっていたためだ。

かまわずベルタは、着陸をめざそうとする。ピネロンの戦闘機に絡んでいく。

そして、下を見てギョツとする。

最も高い建物の屋上に人影が。

青いヒジャブを付けた女性が立っている。

「だ、大統領!」

彼女の姿をピネロン側も確認したのか、いつせいに攻撃を止めた。

次の瞬間――

背後で爆音!

見上げると、空母から炎があがっている。

ピネロンの戦闘機が引き上げていく――いや、空母を守るべく、上空へと集まっていっている。

ベルタが目を凝らすと、地球のものでもピネロンのものでもない、それらより小さいがはるかに高速のロケットのようなものがぐるぐる動いていた。そこから何か投げられ、再び空母から炎が。

「誰?」

ロケットから乗り出した人影が見えた。長い髪だ。

「グラナド軍曹!」

通信器から、先ほどの声が響く。

「ケリー、無事だったんですね?」とベルタ。

「上官を呼び捨てにするな!――それよりあれは?」

「……「遊星仮面」って奴?」

その通り、遊星仮面であった。

ライダーに乗り、シューターを空母に当てている。

当然空母や戦闘機からの、自らへの攻撃も集中してくる。

そんななか――

一瞬でライダーの姿が消えた。ベルタにはそう見えた。

「え?」

次の瞬間、空母から火花が。

「なんて速さ！」

空母の上に移動し、攻撃を加えていたのだ。空母は彼を追う。

ベルタも、彼らを追おうとするが

「グラナド軍曹、なにしてる！大統領を！」

上官の声にベルタはハツとなった。

ピネロン側の複数の戦闘機が、青いヒジャブめがけて降下している。

しかし、アデルは動かない。

「なに考えてる——！」

ベルタも彼女に向けて降下する。

同じ頃の宇宙空間。月基地付近にて——

「二号被災だ！」

地球側の戦闘機がとりまく、ピネロン側の大きな空母の中で、ハチュンの声が響いた。

「それは遊星仮面なる者だ。映像は出ないのか！」

「どこか機材が壊れたようで。ですがなんとか」と、モニターに映ったピネロン軍将校。

周辺では兵士たちがあわただしく動いている。

「もういい！」とハチュン。「命令だ、戦闘機を回収し、すぐ引き揚げろ！奴を振り切れ！」

それ以上破壊されると大気圏脱出がかなわなくなる。あとはこちらにまかせろ」

「ですが、アデル大統領の拘束は……」

「それは二次目的だ。一次目的がかなえば今回はそれでいい。今からの任務は、生き残れ！」

通信を切ると、後ろを振り向いた。

ヘッドギアをかぶせられ、手足を拘束されたヤートがいた。

清潔な服に着替えさせられ……いや、正しくは無理やりかぶせられた状態。

ぎらぎら反抗の目をたぎらせているが、周辺から銃を突き付けられ、しゃべることもでき

ない状態。

ハチュンはチラリと彼を見やったあと、叫ぶ。

「三号、情報システム破壊任務は継続せよ！」

その「三号」は、地球上にいた。

ジュネーブ上空にとどまっていた。

ピネロン側の戦闘機があたりを舞い、地球側の戦闘機と空中戦を繰り広げている。

「容赦なく打ち払え！」

とキニスキー。彼は地球側の戦闘機を率いていた。

部下の声が響く。「キニスキー少尉、これ以上の攻撃はさらに甚大な被害が！」

味方敵かまわず撃ち落とされた戦闘機が、次々町中に落ちていった。

市民たちは逃げまどうしかなく、阿鼻叫喚が広がっていた。

しかしキニスキーは、

「かまわん！連中の目的はこの町の地下にある情報システムの破壊だ。おそらく侵略のための地固めだ！破壊を許せば死傷者の数はこの比ではなくなるだろう！」

その通り、この町の地下深くには、ID時計で国民を管理するための個人情報をおさめたコンピュータなどが埋められていた。

〈逸失の日〉にいったん失われながらも、その後蓄積されていった地球人の個人情報が集められているのだ。

非常に強固なセキュリティで守られていたはずだったが、サップス・ステイツキィによる特殊波長を使つてのデータ書き換えをまねいてしまった。

現在では、それに対する防御対策がなされていたが――

「まさか力づくで破壊に来るとは！行政機密は軍事機密より物理的ガードが弱いことを狙つたか！」

キニスキーは唇を噛んだ。

空母本体からは、自国の戦闘機に当たらないよう途切れ途切れではあるが、強力なレーザー砲が地面に向け放たれていた。

「くそ、空母に近づけん！」

ここでも地球側の戦闘機が苦境に陥っていた。

「エキゾチックマターのせいだ。奴らは、この地上にまき散らしたエキゾチックマターを利用してるのだ」

キニスキーはそれでもなんとか空母への攻撃を行おうとするが、ピネロン側の戦闘機に邪魔されて近づけない。

そのうち、大きな衝撃が。

「くそっ！」

自身の戦闘機の側壁が撃たれたことを知る。

機体が墜落しかける。急いで機体を立て直そうとしていると、ピネロンの戦闘機の影が。

(これまでか！)

しかし、影との間を何かが素通りした。

(なんだ?)

次の瞬間、空母から爆音が。

「ああ！」

すさまじいスピードで動くロケット。見える搭乗員の長い髪。

ロケットから放たれる光が、次々空母に当たる。

「あれは！」

キニスキーにはすでに見慣れた、遊星仮面の姿が。

ライダーに乗って、シューターを空母に投げつけようとしていた。

ピーター、いや遊星仮面は、狙いを定めて空母にシューターを投げつける。

(アースシティにいたのと同じ機種だ。だったら……)

先にアースシティに向かったのは、ベルタが向かったことを知ったからだだった。

あの後、空母を火山地帯まで追いつめた。しかしそこで逃げるように空母はいつきに上

空へと浮上。同時に戦闘機も空母を追うように離れていった。

追おうとしたところで、盗聴していた司令部からのビツツの音が響いてきた。ジュネーブが危ないと。

アースシティに戻ってベルタが無事かどうかを確かめたかったが、それどころではないと察した。

すぐにジュネーブに駆けつけると、とんでもない惨状が広がっていた。

(なんとか空母を抑えないと！)

アースシティで対峙したのと同じ、レーザーを放つ砲身が本体から出たり入ったりするタイプだ。しかし、操作する者の技能の差なのか、こちらの空母は砲身の出し入れが速く、シューターがなかなか当たらない。

(くそ、シューターも無限じゃないのに……)

そこで遊星仮面は、自分に向けあえてレーザー砲を放たせるように仕向けながら、砲身への攻撃を続けた。

こうした状況を見て、キンスキーは決断する。

「われわれの攻撃は戦闘機に全集中せよ！」

空母は素性のしれない不審者にまかせるといふ、彼にとつては苦渋の決断だ。

そんな中、遊星仮面を放ったシューターで、いきなり空母の側壁が大爆発。

空母は一気に大きくバランスを崩す。

(しまった！)

砲身のみを狙い、撤退を促す攻撃のはずが、内部まで破壊してしまった。

このままでは地上に落下し、被害を広げてしまう。

なんとかしないと、とライダーを、空母の船底へ向けた。

そんな時――

空母の船底から光が！

船底が、まるで膜のようなものに包まれた。

空母の落下は止まり、次いで再び動き始めた。

見ると、空母の周辺にごく小型の丸い宇宙船がいくつも。それらからレーザーが放たれ、船底に光の網を作っていたのだ。

その網で動きを封じられ、強制移動させられていることに気づいた空母は、小型宇宙船にめがけ攻撃をかける。

小型宇宙船たちは、レーザーの網をかぶり、なんとか攻撃をかわす。

遊星仮面はそのすきに、空母に残っていた砲身のすべて破壊した。

そんな時――

「聞こえるか！遊星仮面！」

いきなりライダーの中に声が響く。その声はなんと！

「ロペス中尉！」

「そのまま連中にまかせろ。海まで持って行かせろ！」

「彼らは？」

「君は連中を守れ！ピネロンの戦闘機を寄せつけさせるな！」

「……わかった」

遊星仮面はライダーを動かさせた。

一方、ピネロンの戦闘機は、状況に混乱しつつも、空母を追うべく方向を変える。しかし――

「違う！お前たちの敵はこっちだ！」

キニスキーたちが攻撃を加える。

それでも、地球側の攻撃をかくくぐる戦闘機は少なくない。彼らは空母を追い、その船底をおおう小型宇宙船たちに気づき、攻撃を加える。

小型宇宙船は下からの攻撃には弱いのか、二機が相次いで撃ち落とされた。

「ああ！」

しまったと、遊星仮面は悲痛に叫んだ。

レーザー網は一瞬揺らぐが、なんとか持ちこたえる。

遊星仮面は気を立て直し、非力な小型宇宙船たちを守ろうと、追撃してくる戦闘機に対し容赦ない攻撃をかけた。

シューターに対しては、戦闘機はひとたまりもなかった。

爆破し、人が住んでいるであろう地上に落下していく。

遊星仮面、いやピーターは苦しそうに目を閉じた。

(空母を落としてしまう方が被害が大きくなる……)

それで覚悟を決めた。

小型宇宙船たちを守るため、追ってくる戦闘機に攻撃を加え、時に撃沈。

そのうち、地中海が見えてきた。

小型宇宙船たちは離れ、レーザー網は消滅し、空母は海上に落下。

巨大な物体がずぶずぶと沈み、反動で浮かび上がる状態を見守っていた遊星仮面だったが、そこにロペスの声が。

「遊星仮面！聞こえるか！」

「ロペス中尉、あの宇宙船は？彼らはいったい……」

「あとは内地軍にまかせろ！宇宙が危ない！」

ハッとして遊星仮面は空を見やった。

(十)

宇宙空間では必死の攻防が。

ついに、ハチュン率いる空母が地球に向け動き出した。

それを、地球側の戦闘機が群れとなつて、[△]防御ラケット[△]を使って必死で止めようとしていた。彼らを守るべく、数機の戦闘機が空母に攻撃を加えていた。

ハチュンの部下は、船体にしつこくくつつく戦闘機の群れを映像で見やり、

「ハチュン一尉、なぜ攻撃しないんです？」

「近すぎてこちらにも被害が及ぶ」とハチュン。「奴らを振り落とすべく速度をあげるのみ。攻撃はあちらにだけにいい」

「ですがあちらも……」

空母からの攻撃をはねかえすように、凄まじい勢いで動く数機の戦闘機が、別の映像に映っていた。

ハチュンは感心したように、

「噂には聞いていたが、まさに化けモノだな、ティエンとかいう司令官。しかしさすがに自分の部下たちを守るための防衛までしかできん」

「こちらも防衛のままですよ。もっと徹底的に攻撃すれば駆逐は容易では？」

「今はムダな弾は使えん」

「……やはりこの艦にも戦闘機を入れてくるべきだったかと」

「他の空母を丸ごと引き入れる場合も考え、身軽でなければならなかったのだ。大丈夫、まもなく二号が戦闘機を引き連れ戻ってくる。こいつらの駆逐にはそれで十分だ」と、今度はヤートの方向向き、「遊星仮面が出てきたら、協力してもらおうぞ。お前の力なら、あいつの兵器を跳ね返せるバリヤーがはれると聞いている」

「……ぼくといっしょに入ってきた人たちはどこへ？」

「組織の詳細を吐かない以上、貴重な食糧をムダにはできない」

「！」

「おかしなことを言うなあ。お前を痛めつけてた連中じゃないか」

「ホイヘンスの犬め！」

「それは賞賛だな。私は父の代からあの方にお仕えしてるのだ。国のために動かれるあの方に」

「あいつは！」

「冷酷なのは、やむをえないからだ。あの方には穴はいくつもある。それを埋めるのが私の役目。あの方が気を回せない部下たちの命を守るのも私の役目！」

「……あんたは」

「そう、部下たちの救出に向かう。三号の救出に向かう。それが今からの仕事だ！」

そう言ってハチュンは、右のこぶしを強く握った。

一方、ハチュンたちを止めようと張りついている地球側の戦闘機の群れ。

その中には、レザーとクラークが乗った機もあった。

「また速度をあげてきた！」とクラーク。「キンスキー訓練兵、ラケットの出力をあげろ！」

クラークが操縦し、レザーが後ろに乗って、防御ラケットの操作を行っていた。

「中尉、これ以上は……」

「そうか」

「悔しいですが、連中を抑えることはできません……」

「あきらめるな！ 侵攻が時間の問題でも、できるだけそれを遅らせる。時間稼ぎも地球を守る手段だ」

「はい」

クラークは、ぐつと深呼吸をし、

「すまない、キンスキー訓練兵。私がピレイの正体を見破れなかったためにこんなことに……。君を疑って本当にすまなかった」

「……」

「私の父は、東ユーラシアの兵站部の司令官だった。外ヅラはいいが母に暴力をふるう、気の小さい卑怯者だ。だから戦争が始まったとたん、不安のあまり自らの立場を利用して、軍の食糧の一部を横領して現金化したのだ。父を捕らえた君の叔父のキンスキー少尉を怨むのは筋違いだということはわかっている。しかし、母が絶望して命まで絶とうとしては……」

「お母さんが！」

「最近危機から脱したらしいが。しかしそれまでの間私は動揺して……。母は、家族を顧みず暴力ばかりふるう父に代わって私を育ててくれてただけに……。軍人にあるまじきことだ」

「お母さんは助かったんですね。生きてるんですね。大事にしてあげてください。オレ、いや私にはもう……」

「オレでいい！……キンスキー訓練兵、君のところはだいぶややこしいようだな」

「オレの父方の祖母は、ある宗教団体を運営してまして、オレの母は宗教が違うなどとして歓迎されませんでした。祖母はオレのファーストネームも気に入らないようで、子供の頃から名を変えろと何度も」

「はあ、なんだそれは？」

「父も叔父も、祖母のそういうものには関与したくなかった人なんです。母が病気で死んで弱気になったのか、心配した祖母から世話のためにと送りこまれた人と……」

「いえ、いえ、それどころか優しい人で……。ただあまりに父やオレのことを心配するあまり、保護してたソニカのことを叔父に話して……」

「……なるほど、それで親父さんに会いたくなかったのか」

レザーは無言で顔を伏せ、肩を震わせる。

クラークは少し沈黙したあと、明るい声で、

「今はともかく大切な家族や大切な人を守るために戦おう。そして、生きて地球に帰ろう！」

「ええ」

しかしレザーはハッとなる。

「クラーク中尉、あれは！」

レザーが指さした先をクラークも見た。

「地球の戦闘機ではない！ピネロンのだ！」

「近づいてくる。どこからいったい……うわ！」

「これは……磁気だ！」

宇宙に戻ったばかりの二号空母から放たれたピネロン側の戦闘機は、ハチュンの乗る空母側から地球側の戦闘機を引き離そうと、磁気を放ったのだ。

引き離された地球側の戦闘機は、ピネロン側の戦闘機の餌食に。

「レザー！」

突然、機内にユーリの声が響いた。

「ユーリ！」

「最後に代わってもらった！最後に謝りたかった、ボクがあのだスパイに君の家を教えれば
かりに……」

「ユーリ、そんなことはどうでもいい！君には婚約者が！」

——しかし、音声は途切れた。

「ユーリ！」

クラークとレザーの機も空母から離された。

「キニスキー訓練兵、なにかあれば脱出しろ！その服のジェット噴射の使い方はわかって
るな」

「え？」

「宇宙にほおりだされても生き延びれる可能性もある」

「なにを言ってるんです！」

しかし次の瞬間——

クラークの首は吹き飛ばされた。

「あああああ！」

次の瞬間、レザーは外に投げ出された。

レザーは宇宙空間にふわふわ浮く。

（オレは……死んだのか……いや！）

遠くに戦闘機が見える。

（オレを狙ってるのか！）

光った。しかし光は歪んだ。

（！）

見るとすぐ横に、ロケットが。

髪の毛の長い人物が、宇宙空間に浮かんでる。

その人物は、レザーを見ることなく、まっすぐに左手を振った。

引け、との合図だと察したレザーは、ジェット噴射させ、後ろに下る。

髪の毛の長い人物は、ベルトのバックルから光のようなものを手で引き出し、次々と戦闘機
にぶつけていった。

（あれは！）

そうだ、トーカーサス星で見た人物だ。レザーは思い出した。

そして、おそらく自分たちを地球へ戻してくれた人とも。

（あれが遊星仮面なのか？オレとソニカを助けてくれたのか？）

そして、空母の船底から大きな爆音があがった。

レザーは危険を感じ、その場から離れていった。

空母の中——

出現した遊星仮面によるめきたっていた。

「出てきたか！損害は」

「大丈夫です。素材の厚さが盾に」

「しかしいつまでも続かん」

ハチュンは捕らえているヤートのところまで進み、彼にかぶせていたヘッドギアを取り、
「すぐにバリヤーをはれ！」

「な、な！」

「はれ！トーカーサス星でのように！部下たちを殺せばお前を殺す！」
ハチュンの勢いに押され、ヤートは両腕をバンと床につけた。

空母の外――

「ああっ！」

遊星仮面が放ったシューターがはじかれた。
空母全体が光っている。

（あの時と同じだ！）

トーカーサス星で、自分のシューターをはじいた時と。

遊星仮面、いやピーターは思い出した。あの時自分と同じぐらいの年の青年がいたこと
を。

（彼が、この中にいるのか？）

何度かシューターを投げつけるが、すべて跳ね返される。

そして、

「お前は何者だ！」

いきなり、ライダーから地球語が響いた。

（なぜ声が届く？周波数は合わせていないのに）

遊星仮面、いやピーターは自分の首につけた装置を確認する。

ベルタから譲ってもらった声紋変換器をつけていたのだ。

そして、ゆっくりたずねる。

「そういうお前こそ何者だ！」

その声は変換されており、ピーターのものではなかった。
返事はすぐに返ってきた

「私は今回の作戦を指示するハチュン一尉だ！」

ピーターは、ハツとして、バリヤーで光る船体を見た。

（そうか、あのバリヤーが共鳴させるのか！……ハチュン、この人は……そうだ、トーカー
サス星で見た将校だ）

だったら、あの青年もまちがいなくこの空母の中にいる！

その通り、ヤートは空母の中にいて、床に手をついたままふんばっている。

ハチュンはそのヤートに肩に手を置き、通信機のようなもので語る。

「お前がピネロン語も理解できることはわかっている。だがあえて地球語でたずねる。お
前は何者だ？お前の目的はなんだ？」

地球語が理解できるヤートは、操縦席にそのマイクが操縦席につながっていることと、兵士たちがあたふた操作をしている様子を見て、「地球側にも流してるのか!」と。

ハチュンは、ヤートの肩を揺らし、

「その通りだ」

そしてハチュンは繰り返す。

「お前は何者だ?お前の目的はなんだ?」

しばらくして返事が返ってきた。

「人呼んで遊星仮面!目的はひとつ、戦争をやめろ!」

「はあ?」

「戦争はやめろ!地球から去れ!」

「ふ、ふざけるな!話にならない!」

ハチュンは会話を切った。

「そのまま進め、地球へ!」

やがて空母は動き始めた。

「ヤート、床から手を離すな!……一刻も早く三号救出のため地球へ!」

空母が地球へ向かう。

そのまま、地球に突入する気なのだ。

彼らを地球に行かせてはならない。

惨状を再び起こさせてはいけない。

「行かせるか!」

遊星仮面はライダーに乗ったまま、そのまま空母に突っ込んだ。

.....

(十一)

数日後――

地球では、中央ユーラシアの防衛隊本部ビルの修復工事が始まっていた。

それを見ながら、ビッツとニックが話し合っていた。

上空では、周辺護衛のため戦闘機が舞っている。

「では今回のピネロンの目的は、大統領の拉致、それにサップスやゲリラ戦闘員を地球に放つことと、彼らの活動を後押しするために個人管理システムを破壊することだけではなかったのだと?」とビッツ。

「捕虜たちの証言では、どうやら当初は、さらにいくつかの空母を投じて、いつきに地球占領するつもりだったようです。ですが、そうした賭けは危険だとして直前に変更したようです。まずは地球大気の中で自国の戦闘機や機器がどう動くかどうかを確かめる、む

しろそのためのデータを集めることが最大の目的だったと」とニツク。

「で、問題なく動く証明されたわけか。大気中にまき散らされたエキゾチック・マターの作用で」

「ですね。ですから次は本格的侵攻を狙ってきます」

「今度こそ地球占領をめざして……か」

「ただ直近の危機は、紛れ込ませたピネロン人たちの動き」

「戦闘機でのあれだけの攻撃が、彼らを投入させる目くらましだったとは……。キニスキーに任せてはおろが、侵入者の数が前回よりはるかに多いとなれば……」

「ですが前回とは異なり、個人データの書き換えがなかったのは幸いでした。どうか今回は破壊を目的にしていたわけですが、なんとか設備が耐え抜きました。ですから、たしかに侵入してきた人数は多いものの、発見は前回ほどは難しくはないと思います」

「うむ……」

「敵の誤算はさらに、大統領の拉致もかなわず、あれだけの捕虜と、なにより空母を手放さざるを得なかったことです。戦闘機も数多く手に入りましたから、ピネロン側の武器を解析する上でも大きな収穫です」

「……大統領も、無謀な真似をしておつて。人質にとられておればどれほどの……」

「いえ、あれは娘でした」

「娘！……娘のファティマか！」

「はい。その姿は何年も見ておりませんでした。母親そっくりに育ったようで」

「——なに考えてる。ひとり娘をエサにするなど」
「わかりません。ただあの時彼女が核となり、敵に一瞬の動揺を与え、味方呼び寄せる吸引力になり、結果として多くの敵を生け捕りできたわけですが」

「結果論でいえばだがな」

「そしてなによりもの誤算は、「遊星仮面」なる者」

「うむ」

「彼がいなければ、システムも大統領も守れませんでした。おまけに、敵指揮官の乗った空母の侵攻を防いだだけでも、その功績たるや……」

「キニスキーの甥も、彼に救われたとすればつじつまは合う。しかしあの科学は地球のものとは思えんと、ソクラトン教授もおっしゃってた。地球の味方かもしれんが、得体が知れなさすぎる」

「敵も彼の存在を不安視して、いつきに地球占領要することを、今回は見送ったのかもしれない」

「うむ……」

ビッツは腕を組んで、いったん沈黙。

やがて、あごひげを神経質そうになでながら、

「世間の大騒ぎはおさめられんか？」

「無理でしょう。しばらく彼は、地球の救世主などと仰がれることになるでしょう」

「統制を強めているにもかかわらず、またもID時計にノイズが入られた。開戦前の騒ぎと同じだ。煽る奴がいる。「遊星仮面」とどういふ関係なのかは知らんが」

「いいではありませんが。今回軍人だけではなく民間人も大勢亡くなった。その批判から

しばらく目を背けさせられるのですから」

「政府批判、軍批判の裏返しにか！」ビッツは再び「今回の、ある意味わずかな侵攻が地球国民に与えた影響は計り知れん。それは物理的と言うより精神的にだ」

「だからこそ、彼を取り込めばいいのです。「事実」はいくらでも書き換えられます」
そう言っつてニツクはにっこり笑みを浮かべた。

ビッツは、一瞬冷たい刃を突き付けられたような、ぞつとする感覚を覚えた。

そういう感覚は、この温厚で冷静な人物から時おり感じることもあった。さらに、木星戦でのおり人質船が爆破した映像を見た時、彼が混乱し突如叫び声をあげた異様な事態を思い出した。

「一度聞きたいと思っつておつた。君は「事実」を書き換えたことはあるのか？」

「はあ？またいきなりなにを？」

「いや……たしかにそうだな。さすがに疲れておるな」

ビッツは気分転換を図るかのように、またあごひげをいじった。

一方のピネロン星――

ホイヘンスの宇宙船にて。

大画面に、ハチュンの姿が。

「ヤートが逃げたと？」とホイヘンス。

ハチュンは真っ青になっている。

「申しわけございません。いつのまにかヘッドギアをはずして……」

「バカもん！」とイモシ。「どこまで役立たずか、さんざん失敗しおつて！地球側にわが方の科学の粋をさらしおつて！空母が敵にわたったことがどれほどの損害か！」

「申しわけありません」

「ヤートもしよせんは役立たずだ。見つけ出してお前と同様……」

「ハチュン」とホイヘンス。「あのヘッドギアには直前の使用者の脳波が記録されるようになってる。そうだったな、イモシ」

「あ、はい」

「なら行き先はたどれる。ガタガタ言うこともあるまい」

「ホイヘンス様！」

「わしらが国内の事件の処理で動けない間、ハチュンはひとり死傷兵のケアに当たつてくれておつたのだ」と、イモシに言い、ハチュンに向かって、「帰還後休むことなく大義であった。落ち着いたと思うので、当時の状況をもう少し詳しく教えよ」

「当時の？」

「遊星仮面が現れた時の状況だ」

「あ、はい……絡みつく地球の戦闘機をはねのけようとしておりましたところ、奴が現れました。奴の飛び道具はヤートのバリヤーではねのけたのですが、まさか乗り物ごと突進してくるとは……」

「そうなるよヤートのバリヤーは効かなかつたのだな」

「というより物理的に押しつけられたというか……破損はひどく、大気圏突入に耐えられ

る保証がなくなり……」

「空母はもう一隻あったはずだが」とイモシ。

「帰路を確保するため動かせませんでした」

「ではなぜ、予備機器を使わなんだ？破損個所の修復に使えたはずだ。ピネロンの科学が信じられなかったのか！」

「い、いえ、ですが……」

「イモシ！」イラだったホイヘンスが叫んだ。「戦を知らん奴がここぞとばかりにほざくな！」

「ホ、ホイヘンス様？……うわっ！」

イモシは仰天した。口もとに電子鞭を突きつけられたからだ

「傲慢な口をきくな！」とホイヘンス。「そもそもはこんなことぐらいで破損する機体しか作れなかったピネロンの、いやお前の科学の責任だろうが！それに、手負いの機体で地球に突入しても、一方通行になってしまっってはますます損失だわ。それぐらいわからんのか！」

「ホ、ホイヘンス様！」

「それより今回の作戦、お前の主張するとおりにしておいたら、さらにどうなっておったか！それを考えたらお前こそ……」

「ホイヘンス様！」ハチュンが大声を張り上げた。「ホイヘンス様、おやめください。私はイモシ博士に感謝申し上げたいのです」

「は？」「はあ？」

きよとんとするホイヘンスとイモシに対し、ハチュンは、

「今回三号は地球に拿捕されましたが、搭載していた戦闘機の何機かが、自力で地球を脱し、帰還してまいりました。つまり空母でなくても個々の戦闘機も、大気圏通過が可能なのが証明されたのです」

「ほお、なるほど」とホイヘンス。「イモシの科学も口先ばかりではないわけだな」

「ホイヘンス様！」とイモシ。

「ホイヘンス様、その通りです」とハチュン。「ピネロンの科学、博士の科学のおかげで大勢の部下たちが救われました。なのに私は……。空母だけでなく大勢の部下たちを地球に置き去りにしたことは、私の不徳の致すところ」

「安心しろハチュン」とホイヘンス。「すぐには救出できんが、潜ませたサップスに、部下たちの状況は調べさせる」

「ありがとうございます」

「あと、聞きたい。遊星仮面はどうしたのだ？」

「乗り物ごと跳ね返ったのは確認できたのですが、それ以降は機器が壊れまして確認できませんでした。ただ、直前までのデータは取っております。ついでに、地球で拿捕された三号のデータはすべてこちらに移しております。そのあと機器をすべて爆破したと最後の通信で……」

「わかった。ではそちらにあるデータはすべてこちらに流せ。イモシにチェックさせる。それとヘッドギアはわしが直接取りに行く。お前は現地で待つておれ」

「え？」

「兵たちをねぎらいに行く。あと、首都に入った避難民どものもとにも向かう。サップスどもはテロ犯追跡と治安に回しておるのですまんが、わしの護衛を数人用意しておけ」
通信はそこで終了した。

イモシは不満げに、

「ホイヘンス様、ヤートといいハチュンといいゲルゴンといい、甘すぎますぞ！なぜ他の者のように、非情になれないのですか？」

「つまり、わしはお前に非情だと言いたのか？」

「い、いえ」

「お前は昔の誓いを忘れたのか？わしはそれに合わせておるだけだ」

「は……」

「前にも言ったが、兵は資源だ。損失はできるだけ防がねばならん。トーカサス星での時でのような使い方は例外だ。空母が敵の手にわたったのはたしかに痛いが、お前たちがより精度の良い機体をつくればいいだけの話だ」

「簡単にそうおっしゃいますが、簡単なことでは……」

「そのためにもまず、ハチュンからのデータ入手を済ませろ！届いたらすぐに分析に移れ！奴が敵だとはつきりした以上、その対策を練るのだ！」

そう言い切り、ホイヘンスはイモシに背を向け、つかつかとドアの方へ。

「ホイヘンス様、危険は去っております！」とイモシ。「なのにこんな時に動かれるのは……。それにヤートが逃げてる状況では……」

ホイヘンスは立ち止まり、

「ヤートはトロント市に行くことしか頭にない。行かして現実を見せるのもよいだろう」
「ですが」

「死者と行方不明者をむげにすると、わしへの反発につながる。そうなるとハチュンやレガイテたちだけでは抑えきれまい」

そして再び歩きだす。

そして再び、地球――

中央ユーラシアの平原にある、広大な軍人墓地。

たくさんのお墓が整然と並んでいる。

お墓には一人一人の顔が掘られている。

ところどころで、肉親と思える人々が集まっていた。

そうした中を、花を持ち、喪服を着て歩くレザーの姿が。

突然歩みを止めた。

ユーリの顔が掘られたお墓が見えた。その前には、彼の両親と思える二人と、若い女性が泣き崩れていた。

彼らを辛い顔で見ながら、レザーは再び歩き始めた。

途中でカウチャと出会う。

レザーは挨拶しようとするが、カウチャは「非国民」とつぶやいただけで、レザーを無視しそのまますれ違う。

レザーは顔を曇らせたまま、再び進む。

そしてある墓石の前へ。そこにはクラークの顔が。

レザーは墓石の前に花を置き、座り込んで話しかける。

「クラーク中尉、いや、今は大尉でしたね。お母様はこちらに来ることができませんでしたので、オレが代わりです。だいぶショックを受けておられますが、回復されています。ティエン外地司令もお母様の生活は保証するとおっしゃっていますので、ご安心を。仇は必ずとります」

そう言っただけで立ち上がって、ハッとなった。

(仇……仇とはなんなんだ?)

動揺する彼に、後ろから女性の声が。

「もしや、レザー・キンスキー二等兵では？」

「へ？」

振り返ると、喪服を着たベルタが立っていた。

「やっぱり！あなたの叔父さんにとてもよく似てたんで少しつけてたの。ごめんなさい」

「はあ……」

「失礼！あたしはベルタ・グラナド。階級は、今は曹長」

「ああ、大統領を救った英雄の……」

「違うわ。あれは娘さんだったのよ。」

「へ？」

「軍にしちゃ訂正しないでおいた方が都合がいいんでしようね」

そう言っただけでベルタはクラークの墓石を見て、目を伏せ、

「お会いしたことはない方だけど、詳細は聞いてるわ。お母様を守れたことはなによりもの手向けでしょうね」

「ええ」

「それより、あなたは無事でよかった。ピーターがずいぶん心配してたのよ」

「ピーター……え、ピーター！」

「あたしは最近まで彼の護衛してたのよ。あんまりにも忙しくなりすぎて、ついに任務から外されちゃったんだけどね」

「ピーターは、元気なんですか」

「ええ。ただ住まいはいろいろ移されているわ。今度は、ソクラトン教授の孫のリンダちゃんとともにアースシティに」

「アースシティに！」

「大統領には逆らえない」

「なぜ？」

「知らないわよ。でもあなたにもわかるでしょ？彼は常に難しい立ち場だからね」

「……」

「でも彼は賢くて我慢強い。だからあなたにずっと連絡を取れなかったことは理解してね」

「わかってます」

レザーはハッとなり、

「曹長は、どなたか？」

「あたしも大勢の仲間を失ったからね」

あたりからはすすり泣きの声が聞こえてきた。

ベルタはしばらく沈黙したあと、

「それより、ソニカちゃんはあるあなたのことも心配してたわ」

「えええ！」

「やっぱ驚くか。あたしは所属は極地・太平洋区。ローレル島には出入り自由。ピーターやリンダちゃんには彼女のことを定期報告してる」

「ソニカは……ソニカは！」

「ペンと紙と定規をいつも握ってる。定期的に運動する以外はずっと楽譜書いてる。きれいな顔してるのに、中身はとてつもない変人。いつも髪ばっさばっさで」

レザーはほっとし、安堵の表情を。

ベルタはその表情を見てにやりと笑い、

「さすがにわかってんのね。じゃあこれからあなたにも彼女のことを定期報告するわ」

「い、いえ、彼女が無事ならそれで。オレには何もできないし」

「あたしもたいしたことできないわよ。検閲があるから物や文章のやり取りは禁止だし。せいぜい口頭で元気がどうかぐらいしか伝えられない。でも楽譜ならわたせるわよ」

「楽譜？」

レザーは、楽譜を隠している自分の胸に手を置いた。

そして、ふり絞るような小さな声で、

「いえ……いいです」

「いいの？」

「オレ、読めないの」

「そう？でも元気がぐらいは伝えるわね」

そうやってベルタは去っていった。

レザーは動揺していた。

(どうしたんだ、オレは。ソニカのものなんでもほしい。でもなんで拒否したんだ?)
彼の脳裏には、さっき自分を「非国民」と呼んだカウチャの顔が浮かんでいた。

(十二)

「楽譜に？ソニカが?!」

ピーターは、驚いてリンダにたずねた。

ふたりがいるのは軍の輸送機。個室だった。

リンダは右隣に座っていたが、ピーターに顔を背けていた。

「大丈夫だよ、映像は映されてるけど盗聴器はないようだ。……楽譜になにが？」

「楽譜におねえちゃまの言葉が書かれてる」と、リンダはぶっきらぼうに答える。

「どうやって読むんだ？」

リンダは顔を背けたまま。

「ソニカは他に何か？」

なおも、顔を背けたまま。

「リンダちゃん……」

リンダはようやく、顔を背けたまま、

「わたし、時期が来たらピーターにちゃんと教えようとしたのよ。なのに……」

「リンダちゃん？」

「ずっとソニカおねえちゃまは、ピーターのこと心配してたわ。巻き込ませちゃいけないから楽譜のことはしばらく話さないようにって。なのに……」

顔を背けたままであったが、一方で左手でピーターの右腕を握っていた。

ぶるぶる震えていた。

精神が不安定なあかした

「ごめん……」

ピーターは申し訳なさそう顔を伏せた。

無理はない。自分はこつ然と消え、挙動不審な二人組の男に見張られてたのだ。どれほど不安だったことか。

ライダーとともに空母に突進したことまでは覚えている。

その後の記憶がない。

目をあげると、見覚えのある顔が自分を見下ろしていた。

「やあ、目覚めましたか？」

ロペスの顔だった。

「???!」

ピーターは頭をあげた。

薄明りのなかでもわかった、自分がいるがらんとした大きな空間を。

天井は高く、広い。

その中に、小型宇宙船らしきものが何機も。

よく見るとそれらは、アースシティでピネロン側の空母をレーザーの網で抱えて海まで運んでくれた、まさにあの乗り物だった。

そしてピーターはハッとなって自分を確認した。

遊星仮面になる前の服と姿に戻っている。

そばには、トランクが置かれていた。

混乱していた。

「これは、ここは！」

「かつて人類の緊急避難用としてつくられた、海底地下空間の一部」

「じゃあここはローレル島！」

「正しくは、そこつながっているところ」

「じゃあ！」

「期待しないで、お母さんには会わせられません。ここは秘密。君のことです。わかりますね」

「あなたは……」

「よかった」とロペスはホツとため息をつき、「本当に、脳震盪だけですね。脳に異常はないことは確認してたんですが」そう言って立ち上がり、「ならすぐに移動です。今すぐナイル島に戻らないと。……その軍服をすぐに着て！」

「ちよっ！ちよっと！」

「君の不在がバレるとやっかいです。君の乗り物はないし、あそこにある宇宙船を使うわけにもいかない。アナログに移動するしかない」

「ライダー！……ライダーは？」

「あの乗り物、ライダーっていうんですか」

「あ……」

「破損がひどかったので、制作者に連絡して移送しました。今はそのトランクからは呼び出せない。治れば呼び出せるはずですが」

「制作者？」

「君の若い叔父さんです」

「エイブ兄さん！……いや、アブラハム叔父が生きてるんですか！」

「ピネロン星で最も安全で、最も危険なところにいます」

「で、で、でもどうやってピネロン星まで！」

「君が持つてるトランク、それと同じようなものを叔父さんが持つてるんです」

「空間を超えるトランクを！」

「君のお母さんも持つていたはずです。ピネロン星との通信状況を知ろうと、お母さんが使ってたパソコンをキニスキー少尉が一時期血眼になって探してた。君が知らないというならお母さんはとっさの行動として、おそらくトランクの中にそのパソコンを隠したのでしょう」

「待つて……待つてください。知らないばかりで混乱する。あなたはいったい！……そうだ！ローレル島を取り囲むレーザーと、僕のシューターと、僕をはばんだ空母を取り巻いてたレーザーとは同じものだ。そうでしょ？！」

「……」

「そして、あなたも空間を超えるトランクを持つている。でなければあれらの小型宇宙船が……」

「疑問や疑惑はいろいろあるでしょうが、今は急いで！」

「答えてください！」

「今はリンダちゃんをひとりにしておけないでしょ！」

「！」

ピーターは従うしかなかった。

結局、それ以上のことは聞き出すこともできず、ピーターは軍人に化けて、ナイル島へと戻った。

すでに別部隊が到着していたが、あらゆる探知機器が壊れていたおかげで、ピーターはうまく潜り込むことができた。

バイクとマックも、いきなり戻ってきたピーターに仰天。しかしロペスの指示で、否応なくその場を離れさせられた。

リンダはピーターを見て感涙したが、すぐに押し黙ってしまった。

ロペスは、ソニカがベルタに渡すつもりだったという楽譜を預かっていた。ピーターはそれを渡すと静かにリンダは受けとった。

ほどなくピーターには、アースシテイへの移動命令が告げられた。

輸送機の中では、ずっとリンダは顔を背けたままだった。

しかし彼女は、ソクラトンのもとに行くようにとの説得を断固拒否。ピーターとともにアースシテイに行くことを主張したのだ。

ピーターは、リンダの心をはかりかねていた。

そんななかで、リンダは突然、ピーターに顔を背けたまま語り始めた。

「ピーター、わたし、なんかヤバイ人の娘らしいの。ずっと前から知ってた。おじいちゃん、まの息子さんたちをどうかした人の……」

「え？」

「だからわたし、ソニカおねえちゃんやピーターの気持ちが変わらないわけじゃないの。だから、自分だけで抱え込まないで！」

「リンダちゃん……」

リンダはそれ以上、なにも語らなかつた。

ピーターは、リンダが自分の出自に関する何らかの情報を知っていて、それに苦しんでいたことを初めて知った。

それでも、ピーターは彼女の言葉には、はいとは返答できなかった。

彼女には背負わせられないことがある。

ロペスは言った。

「君の活動は、もはや国民の知ることとなりました。今後君は地球の救世主として取り扱われるでしょう。そのため君をおとしめ、命を狙う者も出てくる。それはピネロン側だけでなく、この地球側からでも。」

それでもはや君は、自分のためだけにその力を使うことはできない。君は人々の希望でなければならぬ。「正義の味方」として、キレイでなければならぬ。だから、私が手を汚させないよう尽力します」と。

——なにを言っているのかと、ピーターは思った。

実際には今回も、自分は人を殺してしまっているのではないか！

アースシテイでピネロンの戦闘機を落としたい、おそらくその下で暮らしていた人たちは何人も犠牲になっている。

軍は民間の犠牲者の詳細は言わない。しかし、それはまちがいなく……。

ロペスにはなにか目的がある。おそらく父はそれに気づき、警戒していたのだ。自分もそれには振り回されたくはないと、ピーターははっきりと感じた。

それでも、彼の手を借りざるをえないとも感じた。

自分だけでは、とうてい自分の大切な人々を守りきることはできないのは明白。

そしてベルタが言ったように、もはや手を汚さないと大切なものを守りきることはできないのだ。

ピーターは、覚悟した。